

千葉県森林インストラクター会(FIC)

野外講座安全マニュアル 2013. 6

説明

- 1 本マニュアルはFICの野外講座及び類似する野外での事業(以下事業と略称)を安全に実施することを目的として作成する。
- 2 内容はできるだけ具体的に記述し、実際に役立つものを心がける。
- 3 本マニュアルは「はじめに」から「動植物」まで11のシートから構成されている。(2013. 6月現在)
- 4 「はじめに」には本マニュアルの構成、考え方をまとめた「説明」と「使い方」を記載してある。
- 5 全体の構成は表題部分に左から「NO」「段階」「項目」「対応・対処」「説明及び追加情報」「できれば推奨」の順にタイトルが並べてあり、更に「場面」「重要度」と続き「動植物」までとなっている。
- 6 「段階」は事業の企画・計画から実施、終了までの項目を時系列に掲げてある。、そして後半に「個別事項」、最後に「事故発生時の対応」という順序になっている。
- 7 「項目」は安全に関する項目として適当と思われるものを掲げてある。
- 8 「対応・対処」はその「項目」に対する対応や対処の方法、「説明及び追加情報」には対応や対処の説明と追加の情報などを記載してある。
- 9 「できれば推奨」には、必ずしも実行しなければならない訳ではないが、実行できる場合はより好ましい結果が得られる可能性が高い手法等について記載してある。、
- 10 「場面」以降のタイトルはエクセルの機能を使用して、状況に応じて必要な項目を並べ替えたり、絞り込んで表示させるためのものである。これにより、必要な項目をスピーディーに表示でき、このマニュアルの使い勝手を良くしようという考えである。
- 11 「基本」シートには本マニュアルの項目の全てが記載されており、これだけで用が足りると考えて差し支えない。
- 12 「段階」の項目の「全体」には安全に対する基本的な考え方を記載してある。
- 13 安全に関する事項は自然状況、社会状況、また我々の経験・知識の蓄積により変化するのである。、常にその状況に応じた改編を重ねる必要がある。したがって、安全マニュアルは新たな項目を加え、不要となった項目を削除するなどの改訂を続ける必要がある。、
- 14 この安全マニュアルは野外講座等野外における自然観察行動などを対象にしており、樹木の伐倒、枝打ち、下草や灌木の刈り払い作業などには触れていない。このような作業は既に公開されている安全マニュアルにしたがって実施するものとする。
- 15 林業作業体験、森林探検などの指導などでは、FICの知見が蓄積された段階で必要な安全マニュアルの作成を目指すものとする。

使い方

- 1 このマニュアルはエクセルの「並べ替え」と「フィルター」機能を使い安いような構成としている。
- 2 「重要度」のシートは全項目について重要度をA B Cの3段階に分け、重要度の高い順に並べ替えたものである。ただし、この重要度判定は一つの考え方であり、違う判断もあり得るので、このマニュアルを使用する者が変更してカスタマイズしてかまわない。むしろその方が使い勝手が良くなる。
- 3 「共通事項」以降のシートは「基本シート」の項目からそれぞれの観点に基づいて抽出したもので、多岐にわたる項目を観点ごとに整理して一覧できるようにしたものである。これには「フィルター」機能を使用している。それぞれの観点として剪定した項目に○を付けて、その項目のみを表示するようにしている。これについても、使用者により○を追加、付け替えることにより表示させる項目をカスタマイズすることが可能であり、それぞれに合った安全マニュアルとなることを期待する。

FIC野外活動・行事安全マニュアル【基本ファイル】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
1	全体	安全最優先	FICの活動・行事では常に安全を最優先として判断・行動する。	安全のためには「中止・あきらめる」を選択する勇気を持つ。これをスタッフが共有する。	中止の時の代替プログラムがあると良い。	全て	A					
2	全体	危険の想定	想定できていない危険には対処が困難。常に周囲の状況、その時々によどのような危険があり得るのかを想定するように努める。	自らの知識・経験に加えてFICのヒヤリハット、ニュースになった事故例などから想定できる危険の範囲を広げる。	事故での裁判例などにも注意を払う。	全て	A					
3	全体	危機対応とマニュアル	実際の危機においては、状況に応じてマニュアルと違った対応、場合によっては反対の行動が必要になることがあることを理解し、パニックに陥らず適切に対処する。	ある状況における安全確保の手段が別のリスクを高める場合もあるので、全体のリスクバランスを総合的に判断することが重要。最善の対応が時間を要する場合、最善でなくても、より短時間でとれる行動が安全を確保し、被害を最小限にする場合も多い。	どのような状況でもその状況を総合的に判断してベターな選択をする判断力を日頃から養う。	全て	A					
4	全体	ヒューマンエラー	事故の大部分はヒューマンエラー（人為ミス）から起こることを自覚する。	活動・行事の内容を安全対策の面から常に点検する。参加者全員が自分と全体の安全を確保するよう行動するように注意を促す。	参加者全員に自己責任の自覚を促す。	全て	A		○			
5	全体	ヒューマンエラー2	思い込みによる錯覚、勘違いは何人といえども起こりうる。どんなに経験知識が豊富なベテランでも錯覚、勘違いから逃れられないことを理解する。	錯覚、勘違いに本人は全く気がついていないので、疑問を感じたり、より良い対策・方策を思いついたスタッフはそれをリーダーに遠慮無く伝える。FICではスタッフが気軽に助言しあえる雰囲気構築を常に心掛ける。	スタッフや参加者から助言を受けたリーダーは、その助言を採用しない場合は、できるだけその理由を説明するように心掛ける。この態度が自らの思い込みによる危険を避けることにつながる。	全て	A		○			
6	全体	リーダーとスタッフ	一般参加者を対象とする活動・行事ではリーダーとスタッフ、そして各自の役割を決めておく。	活動・行事が想定外の事態に遭遇した場合の最終判断はリーダーが行うが、リーダーはスタッフの意見を聞き、参考にする。スタッフはその場に応じた適切な意見をリーダーに伝える。	リーダーは活動・行事に応じて知識・経験の深いスタッフの参加を求める。	野外全般	A					
7	計画と下見	計画(企画)立案	計画(企画)立案に当たっては、最新の状況を確認した上での立案に努める。	立案者にとって慣れ親しんだ場所・コースであっても時間の経過により思いがけない変化が生じている場合があることに留意。	ネットや現地に詳しい人からの情報の活用も有効。	野外全般	B				○	○
8	計画と下見	下見の目的	一般参加者を対象とする計画ではその実施方法（時間、実施可能人数(参加者とそれに応じたスタッフ必要人数)、季節、コースの難易度、エスケープルートの有無、等)を確認し、必要に応じて計画を見直す。併せて参加スタッフが現地状況を共有する。	最初の計画にこだわることなく、下見で判明した現地状況に応じて柔軟に計画変更する。	季節毎の実施可能性も確認できると次に繋がる。オブザーバーは安全確保に寄与できる場合が多いのでできる限り活用。	野外全般	A					
9	計画と下見	実施時期	募集案内を出す前、及び本番に近い時期の2回を原則とするが、既に現地の詳細が分かっている場合はどちらかを省略することも可。	既知の場合でも省略せずにどちらかの下見を少人数で行うことは、十分知っている場所といえども現地状況の的確な把握に有効。	現地近くの人から直前の状況が得られれば有効に活用する。	野外全般	B					
10	計画と下見	参加対象者の想定	原則として募集案内前の下見または計画(企画立案時)においてコースの難易度を検討し、参加が可能な体力・経験・知識等を想定して募集案内に反映する。	一般参加者は多岐に渡るが中心となる年齢層、体力等を想定する。	想定からはずれる参加者が予想される場合は対応策を検討。	野外全般	A					
11	計画と下見	危険箇所の確認と対応策の決定	急な斜面や階段、滑りやすい岩場、躓きやすい木の根等危険箇所を確認し、対応方法を決定する。	危険箇所は雨、風等の天候、参加者の体力・知識・経験等によって変化することを考慮する。	悪天時の下見も有効。	野外全般・山道	B			○	○	
12	計画と下見	道迷い防止	迷いそうな場所を現地及び地図上で確認し、必要に応じて下見時に目印を着ける。かつ、状況をスタッフが共有する。	目印には倒木、木の枝等自然物を利用すると除去を省略できることが多い。	カラーテープ、ひもなどを使った場合残すか除去かを適切に判断。	野外全般・山道	B				○	
13	計画と下見	携帯電話	下見においてできる限り携帯電話の通話の可否を場所毎に確認。	通信会社により違うので、実際に使用する携帯電話での確認が必要。	通話の場所毎の可否を位置図に示せると良い。	野外全般・山道	B				○	

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
14	計画と下見	安全チェックリスト	下見に基づいて起こり得る危険を予測し安全チェックリストを作成する。特に、下見時に比して本番では多数が参加することによる状況変化に留意。	作成された安全チェックリストを参加スタッフが内容を点検し、最終版の内容を共有する。	多くのFIC会員から参考意見がみられるとなお良い。	野外全般	A					
15	参加者・募集・受付	募集案内	参加者がコースの難易度を理解し、自分の体力と経験を勘案して応募できるよう工夫をする。	他のコースと比較できる標準的な表現とそのコース自体の特徴を示す表現の両方が記載されると分かりやすい。	全ての企画においてコースの難易度を簡潔に情報提供するように努める。	野外全般	B		○			
16	参加者・募集・受付	受付案内	参加者が適切に準備できるよう必要な内容を簡潔に知らせる。	情報量が多すぎると返って注意を引かないことを十分に考慮。	詳細情報をHP等で知らせる。	野外全般	B		○			
17	参加者・募集・受付	服装(全体)	実施する場所・季節・コースに応じた適切な服装(長袖・長ズボン)を案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	体の露出部分が少なくなるような服装を推奨。ヤマビル、マダニ対策など明るい色の服装が望ましい。		野外全般	B		○			
18	参加者・募集・受付	服装(帽子)	落枝等上部からの落下物、横枝等にぶつけた場合に頭部保護に重要な役割を果たすことを説明し、極力かぶるように案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	忘れた場合は、タオル等の活用など、何らかの方法で頭部を保護することを勧める。	落石等の危険のある場所ではヘルメットも考慮。	野外全般・山道	B	○	○			
19	参加者・募集・受付	服装(上着)	脱ぎ着し易い上着を推奨する。	体温調節し易い上着を推奨。		野外全般	B		○			
20	参加者・募集・受付	服装(手袋)	極力使うことを推奨。冬期等気温の低い季節には暖かいものを。バランスの維持、転倒時の危険回避等、手をポケットに入れない行動を呼びかける。	鋭い岩角、トゲある樹木等を掴む場合があることを考慮して掌側は摩擦が大きくトゲなどを通さない素材でできているものを推奨。		野外全般・山道	B		○			
21	参加者・募集・受付	服装(ズボン)	長ズボンで歩きやすく、繊維が密なものを推奨。	トゲ、岩角に擦れても表面が密だとひっかかり傷ができにくく皮膚を保護する効果が大。		野外全般・山道	B		○			
22	参加者・募集・受付	服装(靴下)	ヤマビル生息地域ではくるぶし以上のものので重ね履きを推奨。	ヤマビル対策として外側の靴下でズボンの裾を覆う履き方が有効。		野外全般・山道	B		○			
23	参加者・募集・受付	服装(靴)	軽登山靴を推奨。ヤマビル生息地域では足首まである深めの靴を推奨。	歩行場所が舗装道路、林道、公園など広く平坦な場所のみの場合は運動靴も可。		野外全般・山道	B		○			
24	参加者・募集・受付	持ち物(雨具)	必携を原則とする。野外全般・山道コースの場合はセパレーツタイプを推奨。	受付案内には持参するように記載しておく。		野外全般・山道	B		○			
25	参加者・募集・受付	持ち物(リュック)	極力両手が使える状態を推奨。	全くの野外未経験者の場合、肩掛けバック等で参加する場合もあるので注意。		野外全般・山道	B		○			
26	参加者・募集・受付	持ち物(杖、ストック)	野外全般・山道ではあとと便利。	慣れないと返って危険な場合もあることを考慮。		野外全般・山道	C		○			
27	参加者・募集・受付	持ち物(敷物)	昼食場所が山の中の場合は持参を推奨。	ヒル・マダニ対策としても重要、数人での使用も可。	持参しなかった参加者がいた場合は持参した参加者に協力を要請。	野外全般・山道	C		○			
28	現地まで	集合場所	集合場所は分かりやすく、バス等使用車両に安全に乗り降りできる場所を選ぶ。現地集合の場合は、分かりやすく広く、交通事故に遭いにくい場所を選ぶ。	自動車道を横断しない、段差が無い広い場所を選ぶ。友人との再会などで注意が散漫になりがちなので注意する。	見通しが良い場所だと、参加者が集まる様子も確認できる。	野外全般	B		○			
29	現地まで	健康確認	目的地までのバスの中で参加者に自身の健康確認を呼びかけ、不調の場合は申告してもらい、場合によってはバスで待機してもらう。	コースの概要、難易度の説明と併せて行い、参加者が自らの体調と比較出来るように配慮。	不調を申告した参加者に対して別メニューの用意があると良い。	野外全般・山道	A		○			
30	現地まで	持ち物確認	当日必要な装備(帽子、手袋、靴等)、持ち物(昼食、飲み物、雨具、敷物等)の確認を呼びかける。	忘れた参加者がいる場合は、他の参加者から借りる等適宜対応。	若干の予備があると便利。	野外全般・山道	C		○			
31	現地まで	行程説明	当日の行程の概要を説明。	あらかじめ行程を知ってもらうことで各自、自分の準備ができる。		野外全般・山道	C				○	

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
32	現地まで	注意点の説明	当日の活動・行事における注意点を説明。トイレの箇所は重要なので必ず説明。	FICメンバーには自明のことでも参加者にとっては気が付いていないことも多いことに留意。	多すぎると印象に残らないので重点項目を選定。	野外全般・山道	C				○	○
33	現地	準備運動	身体だけでなく心の準備にもなるので適切に実施。	バス等での現地までの移動で体が硬くなっていることも考慮する。		野外全般	B		○			
34	現地	班分け	FICの一般参加者対象活動・行事では、安全管理は班毎に行うことを原則とする。	班の人数はFICの野外講座では10人程度を目安にする。人数があまり多くなると掌握が難しくなることに留意。	参加者の経験・体力等を蓄積して安全確保に活用できるように記録整備する。	野外全般	C		○			
35	現地	班行動	一定の間隔での班別行動となるので、常に前後の班の進行に注意を払い、つかず離れずの行動を取る。極力、前の班の最後尾が視認できる距離を維持する。	下見で決定した時間を常に意識し、原則として先頭の班が時間管理に当たり、ずれてきた場合は後続の班がリレー方式で先頭班までその旨を伝える。	携帯電話が使える場所では連絡への活用も効果的。	野外全般・山道	B					
36	現地	班行動(参加者の協力)	班の中に信頼できる参加者がいる場合は、できる範囲で協力してもらう。班の最後尾で班員の確認など。	一般参加者は客ではあるが、役割を快く引き受けていただける場合も多い。	信頼できる参加者情報の蓄積。	野外全般・山道	C		○			
37	現地	説明ポイント	説明、解説は安全な場所で行う。注意場所(落石、落枝、滑落、転倒、有毒動植物等)	前の班の移動を待つのための待機場所の安全にも留意する。参加者の崖下への覗き込み行動に注意。		野外全般・山道	C				○	○
38	現地	説明ポイント2	解説の場所では上部からの落下物の危険が無いかに注意し、参加者の位置などに配慮する。	2012年11月に大垣市で説明を聞いている最中に杉の枝が落ちてきて小学1年生の女子が死亡する事故が発生している。	大垣市の事故ではヘルメットを着用していなかったことからヘルメットの着用の有無が問題になっている。当日は強風。	野外全般	A				○	○
39	現地	危険箇所	危険な箇所の状況に応じて適切な行動を取る。足下が危険な場合(急傾斜、滑り安い・踏きやすい、滑落の恐れなど)はゆっくり通過。頭上が危険な場合(落石、落枝、土石流など)は速やかに通過することを原則とする。	足下の危険と頭上の危険が重なった場所では足下の危険回避を優先し、滑落・転倒などの防止のためにゆっくり進むことを原則とする。参加者の状況から頭上の危険度が高くなる場合は引き返すことも考慮。	参加者の経験・体力、その日の体調をできる限り掌握しておく。	野外全般・山道	B		○		○	
40	現地	注意点の声かけ	現地の状況に応じた注意事項を声かけする。(横枝、濡れた岩、落ち葉の集積、地表に出ている根、掴みやすい所にある枯れ木、枝はね)など	班リーダーや経験者には当然の事項でも参加者には気が付かない点があることを考慮。うるさすぎないことにも配慮。	参加者の状況に応じた声かけができるように参加者のデータを蓄積。	野外全般・山道	C		○			
41	現地	すれ違い、追い越し、追い抜き	コースが片斜面になっている場所で対抗者とすれ違う場合、及び後から来た早い人に追い越してもらった場合は山側で待機する。逆に対抗者が待ってくれている場合及び同じ方向の人を追い越す場合は待っていてくれる人との接触を避け慎重に谷側を通過する。班に分かれての行動であっても、FIC全グループとして山側待機、谷側通過の原則を徹底する。	待機する方が不安定な状態になるので、すれ違う人、追い越す人との接触でバランスを崩しても谷に転落しにくい山側で待機することを原則とする。逆に、こちらが待機している人の脇を通過する時は谷側を通過することを原則とする。但し、相手が谷側で待機している場合は、相手に先に通過してもらうよう依頼するか、こちらが先に通過する場合は相手と接触しないように特に注意を払う。すれ違う場合には、登り優先、人数の少ない方優先の原則に留意。	班長が班員に待機場所の声をかける時に「山側の右あるいは左」のように「山側」という言葉必ず入れるようにすることが参加者に待機場所の原則が理解されて良い。	野外全般・山道	B	○	○			
42	現地	休憩	野外行動では原則として1時間に1回程度の間隔で休憩を取る。休憩時間は、水分補給、糖分補給、服装の調節(上着、防寒着等の着脱)を行える時間とする。概ね5分～10分程度。休憩により各班の間隔が離れてしまわないように留意。下見時に共通の休憩場所を決めておくことも効果的。	広めの場所での説明・解説時を休憩と兼用することも効果的で参加者に「水、糖分、衣服調節」などの呼びかけをした上で解説に入る。この方法だと休憩回数が多くなり、自分の状況に応じて必要な処置を執れる。コース途中で全部の班を集めての解説ポイントを設定すると、休憩との兼用で利点が多い。	班リーダーが給等を班員に配って糖分補給を促すことも効果的。ただし、子供の場合は食物アレルギーのリスクがあるので原則として食べ物配らない。	野外全般・山道	A	○	○			
43	現地	参加者の行動	野外では「走らない」「あわてない」「振り回さない」を厳守。	子供は特に注意。下りで走るとは厳禁。	スタッフも緊急時以外は走らない。	野外全般・山道	B	○	○			

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
44	現地	参加者の行動 2	原則として、林道などの山側急斜面側、下が急勾配の谷側近くを歩かず中央を歩く。	落石、転落の危険をできるだけ回避。斜面にある植物の解説を行う場合は参加者の安全に配慮。	常に参加者の行動に注意を払う。	野外全般・山道	C	○	○			
45	現地	参加者の行動 3	急傾斜や足場の狭い場所で参加者同士で手を貸しあう行動に注意を払う。	手を貸さなければいけない状況では、極力、スタッフが自分の体制を十分に確保したうえで慎重に行う。	自力でのゆっくり、確実な行動を促し、あなたが来るまで待っているとのサインを送る。	野外全般・山道	C	○	○			
46	現地	参加者の危険な行動	参加者がコース外に出る、ふざけて石を投げたり、木にぶら下がったり、枝を振り回すなどの危険な行動を取った場合は速やかに制止する。	参加者の意識として、これくらいという考えでの行動と経験知識がないため全く危険と思わない場合の2つが考えられるので、状況からふさわしい制止方法を考慮。	難しいが、日頃から参加者の性格を把握するように努める。	野外全般・山道	C	○	○			
47	現地	昼食	広くて安全な場所を選定。近くにトイレがあると良い。野外で用を足す時は周辺の人に声をかけるように要請する。昼食後の出発時の人員確認を怠らない。	広い場所が確保できず、班毎となる場合は各班の連絡を密にする。野外でのトイレでは急斜面等危険な場所、遠くへ行かないように要請する。		野外全般・山道	B					
48	現地	トイレ	建物のトイレが無く、野外となる場合は、近くの人に「用を足す」旨を必ず言うってから班を外れること、伝言を聞いた人はそれを班リーダーに伝えるように参加者に伝えておく。 昼食場所などでは、用を足す区域をあらかじめ参加者に伝えるようにする。	用を足しに班から外れたことに気が付かずに行方不明になったり、転落事故に遭う可能性はかなり高いので特に注意が必要。 安全に用が足せる場所を見下し時に確認しておく。 トイレを我慢しての水分不足にも十分注意。		野外全般・山道	B					
49	現地	降車場所	足下がしっかりしていて、ゆっくり降車でき、すぐに自動車道の来ない場所に移動できる場所を選定。途中のトイレ休憩時も同様。	長時間乗車で体が硬くなり、降車時によるけががちで、バスの乗降時は事故の確率が高く慎重な対応を心がける。	スタッフが降車口の下で待機して、よろけた場合に介助できる体制を取ると良い。	野外全般	B		○			
50	終了後	事後検討会	一般参加者を対象に行った行事では、原則として事後検討会を当該行事参加スタッフで実施する。	行事遂行過程で起こった、あるいは気が付いたヒヤリハットの指摘と確認、その解決策、そのほか当該行事から今後の行事遂行に参考になる事項の抽出と確認などを話し合い、必要に応じて報告書を作成する。	ヒヤリハットや今後の参考になりそうとして検討された事項について、ネットその他で参考事例を参照してより理解を深め、今後に活かすように努める。	全て	B					
51	個別危険事項	雷	雷に遭遇した時は、森林の中に逃げ込み、背の高い木から離れる。野原では姿勢を低く保ち、自分が突起物にならないようにする。東屋等に避難する場合は壁や柱から離れた位置を取る。	落雷は突起物に落ちる場合が大半。突起物(背の高い木、飛び出した岩など)から離れる、また、野原や田畑では立っていると自分が突起物になってしまうので、森の中に避難する。近くに樹林が無い場合は低い姿勢(座る、しゃがむ)を保つ。東屋などに避難する場合は壁や柱から少し離れる。東屋に落雷した電流が壁や柱を伝わって地面に流れるため感電しないように。	雷は突然発生する場合もあるので予測が難しいが、当日の気象情報に注意し、雷との遭遇を避けるように留意する。 天候、雲の様子、かすかな雷鳴などなどに注意を払い早めの避難をこころがける。	野外全般	C		○			
52	個別危険事項	強風	強風時は落下物が増えるので上方に注意を払うとともに、バランスを崩して転倒、踏み外しに注意する。	強風で木が揺すられると根本からの落石、枝の落下・飛来、倒木などが起き安いのので崖下、大きな木の下や近くを避ける。	強風の場合は中止も考慮する。	野外全般	C			○		
53	個別危険事項	雨	早めに雨具を着用・使用して体を濡らさないようにする。傘による目や顔などへの接触事故に注意を促す。ゆっくりと余裕を持った行動をするようにする。そのため、必要に応じて行程を短縮する。	足下が濡れて滑り安くなり、雨具により動作がぎこちなくなり、視界も狭くなることなどから様々な事故が起き安くなるので、行動全体をゆっくり運ぶ。衣服が濡れることによる動作の制約も大きくなることに注意。	降雨の状況を見定め、引き返し、中止などを考慮する。	野外全般・山道	C		○			
54	個別危険事項	落石	崖の下や林道の切り土面下など落石の危険がある箇所は上に注意しながら速やかに通り過ぎる。	強風時で木が揺れている時などは特に発生しやすい。つづら折れの道などでは、下の道に落石を落とさないように注意。		野外全般・山道	C			○	○	
55	個別危険事項	倒木	枯れている木や腐っている木などが強風などで倒れる危険があることを常に意識する。	倒木が発生した時に、その倒木に倒れかかられて隣接する木が倒れる場合があることに留意。		野外全般・山道	C			○	○	○

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
56	個別危険事項	枝跳ね	後ろの人に声をかけて注意を促すとともに、跳ねないように押さえるなど協力して、枝跳ね事故を防止する。	前の人通過により後ろの人に枝が跳ねるのを防ぐことを意識させ、協力して行動することの重要性を認識してもらう。	グループ行動での注意点を意識してもらえようリードする。	野外全般・山道	C	○	○			○
57	個別危険事項	枝の落下	枝の落下に注意を払い、強風時には枝の落下が予想される位置での解説、休憩、昼食など長時間とどまる行動を避ける。	強風時に起きやすいが、風が無くても突然落下してくる場合もあることに留意。	林内作業活動においてはヘルメットの着用に心がける。	野外全般	C			○		○
58	個別危険事項	疲労	休憩して水分補給と糖分の補給を行う。	参加者の疲労の予測は難しいが、適度な休憩・水分と糖分補給を心がける。また、服装による温度調節にも気を配り、適切な服装(服の脱ぎ着)をアドバイスする。	行動中の会話などで疲労傾向を把握し、休憩などの対応を早めの実施。	野外全般・山道	B	○	○			
59	個別危険事項	滑落・転落・転倒	参加者の状況を把握して適切にアドバイス。ゆっくり行動することで防止に繋げる。	疲労時には起きやすいことを常に意識。狭い、急峻、崖地などでは適切なアドバイスとゆっくり行動を実施。	危険箇所を通過した気のゆるみからなんでもない箇所では起こる場合もあることに留意。	野外全般・山道	B	○	○		○	
60	個別危険事項	スズメバチ・アシナガバチ	①遭遇した場合は手で払ったり、走ったりなどの急激な行動は厳禁。ゆっくり後退して離れる。 ②初夏から晩秋までのスズメバチの活動時期には、原則として黒っぽい衣服(帽子を含む、)を避ける。また、香水、匂いの強い化粧品、クリーム、整髪料等を使用しない。 スズメバチ・アシナガバチについては事故例も多く、被害も甚大なので更に詳しい情報を設ける。	千葉県ではおおむね5月～12月上旬頃迄が活動期。急激な行動、黒い色や強い匂いに刺激を受けて攻撃してくることに留意。万が一刺された場合はポイズンリムーバー等で吸引。ショック症状が起きる場合は救急車を要請。	下見時に巣を見つけた場合はできるだけ回避ルートを取るようになる。可能ならば駆除しておく。	野外全般	A	○	○			○
61	個別危険事項	ヤマビル	ヤマビル生息地域では、短靴ではなく、くるぶし以上の靴、靴下を二重に、ズボンの裾を上靴の靴下の中に入れ、皮膚にヤマビルが侵入しにくいスタイルを推奨する。靴などに食塩水、忌避剤等の使用も有効。吸血された場合はきれいな水で洗い絆創膏を貼る。	ヤマビルは湿っている地面、落ち葉の層などに居るので、足下からの侵入を防ぐ。明るい色の服装だと気づきやすい。参加者相互の監視体制による早期発見と除去が有効。吸血時に血液凝固を防ぐ物質を出すので、吸血部の地を少し押し出すと良い。清澄山系から清和地域に拡大中。	コースの中で湿っていて落ち葉の積もっている場所での解説を避けるなど、ヤマビルのいるような場所で足を止めない。	野外全般・山道	C	○	○			○
62	個別危険事項	マムシ・ヤマカガシ等毒蛇	思いもかけない場所に居ることがあるので注意。発見したら、速やかに離れるとともに他の人に知らせる。万が一噛まれた場合は救急車を要請。噛まれた後には毒が全身に回らないように激しい運動はしない。	人間が心地良いと感じる場所に居たりすることがあることに留意。中には毒蛇を見たことがない人(特に子供や若人も多く)なので注意を喚起する。	ポイズンリムーバーを持参していれば毒を吸い出す。知らないため気にせず近づくと人がいることに留意。	野外全般・山道	C	○	○			○
63	個別危険事項	イノシシ	イノシシを発見した場合は他の人に知らせ、ゆっくりと後退する形で遠ざかるように行動。背中をイノシシに見せるような形の行動はイノシシを興奮させて襲ってくる場合があるので避ける。	突然の遭遇が最も危険。遭遇した場合は落ち着いて行動。ビックリしての転倒、転落などに注意。生息域は南房総地域から北総地域に広がっている。	2012. 1.8午前9時半頃に鴨川市の関東ふれあいの道でイノシシと遭遇したハイカーが襲われてけがをした事例あり。生息密度が高い南房総地域では鈴などを携帯して相手に人間の存在を知らせることも考慮。	野外全般・山道	C					○
64	個別危険事項	マダニ	春から秋の活動期にかけてはマダニに噛まれないように肌の露出を避ける服装(長袖、長ズボン)を心がける。	マダニが媒介するウイルス感染等を防ぐため、マダニに噛まれないことを心がける。野外活動の後は風呂に入り体を点検。ダニが食いついている場合は無理に剥がさず(口が残ると切開して)とる羽目に)医者(皮膚科)に行き、「山に行きマダニかも知れない」と申告するように説明。(中には知らない医者もいる。)	明るい色の服装だとダニに気が付きやすく推奨。ダニがしっかり皮膚に食いつくまで1日程度かかる場合もあり、風呂は非常に有効。背中、首の後ろなどみえない所にも注意。	野外全般・山道	C					○
65	個別危険事項	ツタウルシ・ハゼ等かぶれる植物やトゲのある植物	適切なアドバイスをを行いかぶれ事故やトゲによるけがに遭わないよう注意する。	適切なアドバイスによる注意喚起が重要。危険な植物に気を取られての転落・転倒等にも留意。	下見時に除去できれば除去しておく。	野外全般・山道	C					○

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
66	個別危険事項	木橋・吊り橋	年数の経っている木橋・吊り橋は一人ずつ渡ることを原則とする。橋の上で立ち止まらずに連続して渡る場合は前の人が2／3以上進んだら次の人が渡り始める。橋の揺れが大きくなった場合は収まるまで少し待つ。	年数が経っている木橋等は壊れる危険があるので一人ずつ渡ることを原則とするが、橋の長さの2／3の間隔を置けば、一人が橋の中央に居る時の荷重を超えないので次の人が渡り始めて良い。揺れは共振現象により崩落の危険性が高まるので収まるまで待つ。	安全そうに見える木橋や吊り橋でもふざけて皆で揺らすことは最も危険。かつて丹沢で子供達が揺らして崩落した事故あり。	野外全般・山道	C				○	
67	個別危険事項	トンネル	トンネル内は暗く、水溜まりができていたり、ぬかっけていて滑りやすい場所が合ったりするので、リーダーが適切に誘導しゆっくり行動する。ランプがあると便利なことも多い。	トンネル内はいきなり暗くなるので目が慣れるまでゆっくり行動する。素掘りのトンネルでは天井、側壁からの落石、落盤の危険も考慮して安全と思われるコース取りに努める。	トンネルの安全度の判断は難しく、雨宿りなどに使う場合も危険があることに留意する。	野外全般・山道	C				○	
68	個別危険事項	安全柵・ロープ等	谷側の安全柵や支柱、ロープ・鎖などに寄りかかったり、掴んで体重をかけたりしない。但し、よけたりと緊急の場合は利用することはやむを得ないが、緊急時のみ、かつバランス維持程度で利用。体重をかけない。	設置されている安全柵やロープは老朽化したり根元が安定していない場合が多いので体重をかけるような使い方はしない。あくまで視線誘導のためとして取り扱う。	一見、安全なように見えても、谷側の構造物は視線誘導のためと考える。	野外全般・山道	C	○	○			
69	事故発生時の対応	事故発生時の対応	対応の順番は状況に応じて適切に判断 ① 事故者の救急救命活動 ② 緊急支援要請(消防＝119番警察＝110番) ③ 事故者以外のメンバーの安全確保 ④ FICメンバーの適切な役割分担、役割にしたがった行動 ⑤ 安全担当ほか上記連絡先への適切な連絡 ⑥ 事故者連絡先(家族等)への連絡 ⑦ バス会社への連絡(必要な場合)	事故発生時第1に現場での対応に専念することを原則とする。 その上で「FIC緊急時対応」表を参照して次の通り連絡する。 ① 緊急事態に応じて適切な担当者に連絡する。 ② 緊急連絡を受けた者は、更に連絡が必要と判断される担当者に連絡。 ③ 緊急連絡発信者は連絡が済み次第、現場での対応に専念することを原則とし、その後の状況に応じて追加情報を発信する。	事故の緊急性が低い場合は、 ① 応急手当のみとすることも可。 ② 事故の内容が些細な場合に大げさに取り扱うことは事故者も望まないとと思われるので本人の思いを尊重する。	全て	A					

FIC野外活動・行事安全マニュアル【重要度ファイル】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
1	全体	安全最優先	FICの活動・行事では常に安全を最優先として判断・行動する。	安全のためには「中止・あきらめる」を選択する勇気を持つ。これをスタッフが共有する。	中止の時の代替プログラムがあると良い。	全て	A					
2	全体	危険の想定	想定できていない危険には対処が困難。常に周囲の状況、その時々によどのような危険があり得るのかを想定するように努める。	自らの知識・経験に加えてFICのヒヤリハット、ニュースになった事故例などから想定できる危険の範囲を広げる。	事故での裁判例などにも注意を払う。	全て	A					
3	全体	危機対応とマニュアル	実際の危機においては、状況に応じてマニュアルと違った対応、場合によっては反対の行動が必要になることがあることを理解し、パニックに陥らず適切に対処する。	ある状況における安全確保の手段が別のリスクを高める場合もあるので、全体のリスクバランスを総合的に判断することが重要。最善の対応が時間を要する場合、最善でなくても、より短時間でとれる行動が安全を確保し、被害を最小限にする場合も多い。	どのような状況でもその状況を総合的に判断してベターな選択をする判断力を日頃から養う。	全て	A					
4	全体	ヒューマンエラー	事故の大部分はヒューマンエラー(人為ミス)から起こることを自覚する。	活動・行事の内容を安全対策の面から常に点検する。参加者全員が自分と全体の安全を確保するよう行動するように注意を促す。	参加者全員に自己責任の自覚を促す。	全て	A		○			
5	全体	ヒューマンエラー2	思い込みによる錯覚、勘違いは何人といえども起こりうる。どんなに経験知識が豊富なベテランでも錯覚、勘違いから逃れられないことを理解する。	錯覚、勘違いに本人は全く気がついていないので、疑問を感じたり、より良い対策・方策を思いついたスタッフはそれをリーダーに遠慮無く伝える。FICではスタッフが気軽に助言しあえる雰囲気構築を常に心掛ける。	スタッフや参加者から助言を受けたリーダーは、その助言を採用しない場合は、できるだけその理由を説明するように心掛ける。この態度が自らの思い込みによる危険を避けることにつながる。	全て	A		○			
6	全体	リーダーとスタッフ	一般参加者を対象とする活動・行事ではリーダーとスタッフ、そして各自の役割を決めておく。	活動・行事が想定外の事態に遭遇した場合の最終判断はリーダーが行うが、リーダーはスタッフの意見を聞き、参考にする。スタッフはその場に応じた適切な意見をリーダーに伝える。	リーダーは活動・行事に応じて知識・経験の深いスタッフの参加を求める。	野外全般	A					
8	計画と下見	下見の目的	一般参加者を対象とする計画ではその実施方法(時間、実施可能人数《参加者とそれに応じたスタッフ必要人数》、季節、コースの難易度、エスケープルートの有無、等)を確認し、必要に応じて計画を見直す。併せて参加スタッフが現地状況を共有する。	最初の計画にこだわることなく、下見で判明した現地状況に応じて柔軟に計画変更する。	季節毎の実施可能性も確認できると次に繋がる。オブザーバーは安全確保に寄与できる場合が多いのでできる限り活用。	野外全般	A					
10	計画と下見	参加対象者の想定	原則として募集案内前の下見または計画(企画立案時)においてコースの難易度を検討し、参加が可能な体力・経験・知識等を想定して募集案内に反映する。	一般参加者は多岐に渡るが中心となる年齢層、体力等を想定する。	想定からはずれる参加者が予想される場合は対応策を検討。	野外全般	A					
14	計画と下見	安全チェックリスト	下見に基づいて起こり得る危険を予測し安全チェックリストを作成する。特に、下見時に比して本番では多数が参加することによる状況変化に留意。	作成された安全チェックリストを参加スタッフが内容を点検し、最終版の内容を共有する。	多くのFIC会員から参考意見がみられるとなお良い。	野外全般	A					
29	現地まで	健康確認	目的地までのバスの中で参加者に自身の健康確認を呼びかけ、不調の場合は申告してもらい、場合によってはバスで待機してもらう。	コースの概要、難易度の説明と併せて行い、参加者が自らの体調と比較出来るように配慮。	不調を申告した参加者に対して別メニューの用意があると良い。	野外全般・山道	A		○			

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
38	現地	説明ポイント2	解説の場所では上部からの落下物の危険が無いか注意し、参加者の位置などに配慮する。	2012年11月に大垣市で説明を聞いている最中に杉の枝が落ちてきて小学1年生の女子が死亡する事故が発生している。	大垣市の事故ではヘルメットを着用していなかったことからヘルメットの着用の有無が問題になっている。当日は強風。	野外全般	A				○	○
42	現地	休憩	野外行動では原則として1時間に1回程度の間隔で休憩を取る。休憩時間は、水分補給、糖分補給、服装の調節(上着、防寒着等の着脱)を行える時間とする。概ね5分～10分程度。 休憩により各班の間隔が離れてしまわないように留意。下見時に共通の休憩場所を決めておくことも効果的。	広めの場所での説明・解説時を休憩と兼用することも効果的で参加者に「水、糖分、衣服調節」などの呼びかけをした上で解説に入る。この方法だと休憩回数が多くなり、自分の状況に応じて必要な処置を執れる。コース途中に全部の班を集めての解説ポイントを設定すると、休憩との兼用で利点が多い。	班リーダーが飴等を班員に配って糖分補給を促すことも効果的。ただし、子供の場合は食物アレルギーのリスクがあるので原則として食べ物は配らない。	野外全般・山道	A	○	○			
60	個別危険事項	スズメバチ・アシナガバチ	①遭遇した場合は手で払ったり、走ったりなどの急激な行動は厳禁。ゆっくり後退して離れる。 ②初夏から晩秋までのスズメバチの活動時期には、原則として黒っぽい衣服(帽子を含む、)を避ける。また、香水、匂いの強い化粧品、クリーム等を使用しない。 スズメバチ・アシナガバチについては事故例も多く、被害も甚大なので更に詳しい情報を設ける。	千葉県ではおおむね5月～12月上旬頃迄が活動期。急激な行動、黒い色や強い匂いに刺激を受けて攻撃してくることに留意。万が一刺された場合はボイズンリムーバー等で吸引。ショック症状が起きる場合は救急車を要請。	下見時に巣を見つけた場合はできるだけ回避ルートを取るようにする。可能ならば駆除しておく。	野外全般	A	○	○			○
69	事故発生時の対応	事故発生時の対応	対応の順番は状況に応じて適切に判断 ① 事故者の救急救命活動 ② 緊急支援要請(消防＝119番警察＝110番) ③ 事故者以外のメンバーの安全確保 ④ FICメンバーの適切な役割分担、役割にしたがった行動 ⑤ 安全担当ほか上記連絡先への適切な連絡 ⑥ 事故者連絡先(家族等)への連絡 ⑦ バス会社への連絡(必要な場合)	事故発生時期第1に現場での対応に専念することを原則とする。 その上で「FIC緊急時対応」表を参照して次の通り連絡する。 ① 緊急事態に応じて適切な担当者に連絡する。 ② 緊急連絡を受けた者は、更に連絡が必要と判断される担当者に連絡。 ③ 緊急連絡発信者は連絡が済み次第、現場での対応に専念することを原則とし、その後の状況に応じて追加情報を発信する。	事故の緊急性が低い場合は、 ① 応急手当のみとすることも可。 ② 事故の内容が些細な場合に大げさに取り扱うことは事故者も望まないので本人の思いを尊重する。	全て	A					
7	計画と下見	計画(企画)立案	計画(企画)立案に当たっては、最新の状況を確認した上での立案に努める。	立案者にとって慣れ親しんだ場所・コースであっても時間の経過により思いがけない変化が生じている場合があることに留意。	ネットや現地に詳しい人からの情報の活用も有効。	野外全般	B				○	○
9	計画と下見	実施時期	募集案内を出す前、及び本番に近い時期の2回を原則とするが、既に現地の詳細が分かっている場合はどちらかを省略することも可。	既知の場合でも省略せずにどちらかの下見を少人数で行うことは、十分知っている場所といえども現地状況の的確な把握に有効。	現地近くの人から直前の状況が得られれば有効に活用する。	野外全般	B					
11	計画と下見	危険箇所の確認と対応策の決定	急な斜面や階段、滑りやすい岩場、躓きやすい木の根等危険箇所を確認し、対応方法を決定する。	危険箇所は雨、風等の天候、参加者の体力・知識・経験等によって変化することを考慮する。	悪天時の下見も有効。	野外全般・山道	B			○	○	
12	計画と下見	道迷い防止	迷いそうな場所を現地及び地図上で確認し、必要に応じて下見時に目印を着ける。かつ、状況をスタッフが共有する。	目印には倒木、木の枝等自然物を利用すると除去を省略できることが多い。	カラーテープ、ひもなどを使った場合残すか除去かを適切に判断。	野外全般・山道	B				○	
13	計画と下見	携帯電話	下見においてできる限り携帯電話の通話の可否を場所毎に確認。	通信会社により違うので、実際に使用する携帯電話での確認が必要。	通話の場所毎の可否を位置図に示せると良い。	野外全般・山道	B				○	

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
15	参加者・募集・受付	募集案内	参加者がコースの難易度を理解し、自分の体力と経験を勘案して応募できるよう工夫をする。	他のコースと比較できる標準的な表現とそのコース自体の特徴を示す表現の両方が記載されると分かりやすい。	全ての企画においてコースの難易度を簡潔に情報提供するように努める。	野外全般	B		○			
16	参加者・募集・受付	受付案内	参加者が適切に準備できるよう必要な内容を簡潔に知らせる。	情報量が多すぎると返って注意を引かないことを十分に考慮。	詳細情報をHP等で知らせる。	野外全般	B		○			
17	参加者・募集・受付	服装(全体)	実施する場所・季節・コースに応じた適切な服装(長袖・長ズボン)を案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	体の露出部分が少なくなるような服装を推奨。ヤマビル、マダニ対策など明るい色の服装が望ましい。		野外全般	B		○			
18	参加者・募集・受付	服装(帽子)	落枝等上部からの落下物、横枝等につけた場合に頭部保護に重要な役割を果たすことを説明し、極力かぶるように案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	忘れた場合は、タオル等の活用など、何らかの方法で頭部を保護することを勧める。	落石等の危険のある場所ではヘルメットも考慮。	野外全般・山道	B	○	○			
19	参加者・募集・受付	服装(上着)	脱ぎ着し易い上着を推奨する。	体温調節し易い上着を推奨。		野外全般	B		○			
20	参加者・募集・受付	服装(手袋)	極力使うことを推奨。冬期等気温の低い季節には暖かいものを。バランスの維持、転倒時の危険回避等、手をポケットに入れない行動を呼びかける。	鋭い岩角、トゲある樹木等を掴む場合があることを考慮して掌側には摩擦が大きくトゲなどを通さない素材でできているものを推奨。		野外全般・山道	B		○			
21	参加者・募集・受付	服装(ズボン)	長ズボンで歩きやすく、繊維が密なものを推奨。	トゲ、岩角に擦れても表面が密だとひっかき傷がでにくく皮膚を保護する効果が大。		野外全般・山道	B		○			
22	参加者・募集・受付	服装(靴下)	ヤマビル生息地域ではくるぶし以上のものので重ね履きを推奨。	ヤマビル対策として外側の靴下でズボンの裾を覆う履き方が有効。		野外全般・山道	B		○			
23	参加者・募集・受付	服装(靴)	軽登山靴を推奨。ヤマビル生息地域では足首まである深めの靴を推奨。	歩行場所が舗装道路、林道、公園など広く平坦な場所のみの場合は運動靴も可。		野外全般・山道	B		○			
24	参加者・募集・受付	持ち物(雨具)	必携を原則とする。野外全般・山道コースの場合はセパレーツタイプを推奨。	受付案内には持参するように記載しておく。		野外全般・山道	B		○			
25	参加者・募集・受付	持ち物(リュック)	極力両手が使える状態を推奨。	全くの野外未経験者の場合、肩掛けバック等で参加する場合もあるので注意。		野外全般・山道	B		○			
28	現地まで	集合場所	集合場所は分かりやすく、バス等使用車両に安全に乗り降りできる場所を選ぶ。現地集合の場合は、分かりやすく広く、交通事故に遭いにくい場所を選ぶ。	自動車道を横断しない、段差が無い広い場所を選ぶ。友人との再会などで注意が散漫になりがちなことに注意する。	見通しが良い場所だと、参加者が集まる様子も確認できる。	野外全般	B		○			
33	現地	準備運動	身体だけでなく心の準備にもなるので適切に実施。	バス等での現地までの移動で体が硬くなっていることも考慮する。		野外全般	B		○			
35	現地	班行動	一定の間隔での班別行動となるので、常に前後の班の進行に注意を払い、つかず離れずの行動を取る。極力、前の班の最後尾が視認できる距離を維持する。	下見で決定した時間を常に意識し、原則として先頭の班が時間管理に当たり、ずれてきた場合は後続の班がリレー方式で先頭班までその旨を伝える。	携帯電話が使える場所では連絡への活用も効果的。	野外全般・山道	B					
39	現地	危険箇所	危険な箇所の状況に応じて適切な行動を取る。足下が危険な場合(急傾斜、滑り安い・踏みやすい、滑落の恐れなど)はゆっくり通過。頭上が危険な場合(落石、落枝、土石流など)は速やかに通過することを原則とする。	足下の危険と頭上の危険が重なった場所では足下の危険回避を優先し、滑落・転倒などの防止のためにゆっくり進むことを原則とする。参加者の状況から頭上の危険度が高くなる場合は引き返すことも考慮。	参加者の経験・体力、その日の体調をできる限り掌握しておく。	野外全般・山道	B		○		○	

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
41	現地	すれ違い、追い越され、追い抜き	コースが片斜面になっている場所で対抗者とすれ違う場合、及び後ろから来た早い人に追い越してもらう場合は山側で待機する。班に對抗者が待ってくれている場合及び同じ方向の人を追い越す場合は待っていてくれる人との接触を避け慎重に谷側を通過する。班に分かれての行動であっても、FIC全グループとして山側待機、谷側通過の原則を徹底する。	待機する方が不安定な状態になるので、すれ違う人、追い越す人との接触でバランスを崩しても谷に転落しにくい山側で待機することを原則とする。逆に、こちらが待機している人の脇を通過する時は谷側を通過することを原則とする。但し、相手が谷側で待機している場合は、相手に先に通過してもらおうよう依頼するか、こちらが先に通過する場合は相手と接触しないように特に注意を払う。すれ違う場合には、登り優先、人数の少ない方優先の原則に留意。	班長が班員に待機場所の声をかける時に「山側の右あるいは左」のように「山側」という言葉を必ず入れるようにすることが参加者に待機場所の原則が理解されて良い。	野外全般・山道	B	○	○			
43	現地	参加者の行動	野外では「走らない」「あわてない」「振り回さない」を厳守。	子供は特に注意。下りで走るとは厳禁。	スタッフも緊急時以外は走らない。	野外全般・山道	B	○	○			
47	現地	昼食	広くて安全な場所を選定。近くにトイレがあると良い。野外で用を足す時は周辺の人に声をかけるように要請する。昼食後の出発時の人員確認を怠らない。	広い場所が確保できず、班毎となる場合は各班の連絡を密にする。野外でのトイレでは急斜面等危険な場所、遠くへ行かないように要請する。		野外全般・山道	B					
48	現地	トイレ	建物のトイレが無く、野外となる場合は、近くの人に「用を足す」旨を必ず言ってから班を外れること、伝言を聞いた人はそれを班リーダーに伝えるように参加者に伝えておく。昼食場所などでは、用を足す区域をあらかじめ参加者に伝えるようにする。	用を足しに班から外れたことに気が付かずに行方不明になったり、転落事故に遭う可能性はかなり高いので特に注意が必要。安全に用が足せる場所を下見時に確認しておく。トイレを我慢しての水分不足にも十分注意。		野外全般・山道	B					
49	現地	降車場所	足下がしっかりとっていて、ゆっくり降車でき、すぐに自動車道の来ない場所に移動できる場所を選定。途中のトイレ休憩時も同様。	長時間乗車で体が硬くなり、降車時によるけががちで、バスの乗降時は事故の確率が高く慎重な対応を心がける。	スタッフが降車口の下で待機して、よろけた場合に介助できる体制を取ると良い。	野外全般	B		○			
50	終了後	事後検討会	一般参加者を対象に行った行事では、原則として事後検討会を当該行事参加スタッフで実施する。	行事遂行過程で起こった、あるいは気が付いたヒヤリハットの指摘と確認、その解決策、そのほか当該行事から今後の行事遂行に参考になる事項の抽出と確認などを話し合い、必要に応じて報告書を作成する。	ヒヤリハットや今後の参考になりそうとして検討された事項について、ネットその他で参考事例を参照してより理解を深め、今後活かすように努める。	全て	B					
58	個別危険事項	疲労	休憩して水分補給と糖分の補給を行う。	参加者の疲労の予測は難しいが、適度な休憩・水分と糖分補給を心がける。また、服装による温度調節にも気を配り、適切な服装(服の脱ぎ着)をアドバイスする。	行動中の会話などで疲労傾向を把握し、休憩などの対応を早めの実施。	野外全般・山道	B	○	○			
59	個別危険事項	滑落・転落・転倒	参加者の状況を把握して適切にアドバイス。ゆっくり行動することで防止に繋げる。	疲労時には起きやすいことを常に意識。狭い、急峻、崖地などでは適切なアドバイスとゆっくり行動を実施。	危険箇所を通過した気のゆるみからなんでもない箇所でも起こる場合もあることに留意。	野外全般・山道	B	○	○		○	
26	参加者・募集・受付	持ち物(杖、ストック)	野外全般・山道ではあると便利。	慣れないと返って危険な場合もあることを考慮。		野外全般・山道	C		○			
27	参加者・募集・受付	持ち物(敷物)	昼食場所が山の中の場合は持参を推奨。	ヒル・マダニ対策としても重要、数人での使用も可。	持参しなかった参加者がいた場合は持参した参加者に協力を要請。	野外全般・山道	C		○			

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
30	現地まで	持ち物確認	当日必要な装備(帽子、手袋、靴等)、持ち物(昼食、飲み物、雨具、敷物等)の確認を呼びかける。	忘れた参加者がいる場合は、他の参加者から借りる等適宜対応。	若干の予備があると便利。	野外全般・山道	C		○			
31	現地まで	行程説明	当日の行程の概要を説明。	あらかじめ行程を知ってもらうことで各自、自分の準備ができる。		野外全般・山道	C				○	
32	現地まで	注意点の説明	当日の活動・行事における注意点を説明。トイレの箇所は重要なので必ず説明。	FICメンバーには自明のことでも参加者にとっては気が付いていないことも多いことに留意。	多すぎると印象に残らないので重点項目を選定。	野外全般・山道	C				○	○
34	現地	班分け	FICの一般参加者対象活動・行事では、安全管理は班毎に行うことを原則とする。	班の人数はFICの野外講座では10人程度を目安にする。人数があまり多くなると掌握が難しくなることに留意。	参加者の経験・体力等を蓄積して安全確保に活用できるように記録整備する。	野外全般	C		○			
36	現地	班行動(参加者の協力)	班の中に信頼できる参加者がいる場合は、できる範囲で協力してもらう。班の最後尾で班員の確認など。	一般参加者は客ではあるが、役割を快く引き受けていただける場合も多い。	信頼できる参加者情報の蓄積。	野外全般・山道	C		○			
37	現地	説明ポイント	説明、解説は安全な場所で行う。注意場所(落石、落枝、滑落、転倒、有毒動植物等)	前の班の移動を待つための待機場所の安全にも留意する。参加者の崖下への覗き込み行動に注意。		野外全般・山道	C				○	○
40	現地	注意点の声かけ	現地の状況に応じた注意事項を声かけする。(横枝、濡れた岩、落ち葉の集積、地表に出ている根、掴みやすい所にある枯れ木、枝はね)など	班リーダーや経験者には当然の事項でも参加者には気が付かない点があることを考慮。うるさすぎないことにも配慮。	参加者の状況に応じた声かけができるように参加者のデータを蓄積。	野外全般・山道	C		○			
44	現地	参加者の行動 2	原則として、林道などの山側急斜面側、下が急勾配の谷側近くを歩かず中央を歩く。	落石、転落の危険をできるだけ回避。斜面にある植物の解説を行う場合は参加者の安全に配慮。	常に参加者の行動に注意を払う。	野外全般・山道	C	○	○			
45	現地	参加者の行動 3	急傾斜や足場の狭い場所で参加者同士で手を貸しあう行動に注意を払う。	手を貸さなければいけない状況では、極力、スタッフが自分の体制を十分に確保したうえで慎重に行う。	自力でのゆっくり、確実な行動を促し、あなたが来るまで待っているとサインを送る。	野外全般・山道	C	○	○			
46	現地	参加者の危険な行動	参加者がコース外に出る、ふざけて石を投げたり、木にぶら下がったり、枝を振り回すなどの危険な行動を取った場合は速やかに制止する。	参加者の意識として、これくらいはという考えでの行動と経験知識がないため全く危険と思わない場合の2つが考えられるので、状況からふさわしい制止方法を考慮。	難しいが、日頃から参加者の性格を把握するように努める。	野外全般・山道	C	○	○			
51	個別危険事項	雷	雷に遭遇した時は、森林の中に逃げ込み、背の高い木から離れる。野原では姿勢を低く保ち、自分が突起物にならないようにする。東屋等に避難する場合は壁や柱から離れた位置を取る。	落雷は突起物に落ちる場合が大半。突起物(背の高い木、飛び出した岩など)から離れる、また、野原や田畑では立っていると自分が突起物になってしまうので、森の中に避難する。近くに樹林が無い場合は低い姿勢(座る、しゃがむ)を保つ。東屋などに避難する場合は壁や柱から少し離れる。東屋に落雷した電流が壁や柱を伝わって地面に流れるため感電しないように。	雷は突然発生する場合もあるので予測が難しいが、当日の気象情報に注意し、雷との遭遇を避けるように留意する。	野外全般	C			○		
52	個別危険事項	強風	強風時は落下物が増えるので上方に注意を払うとともに、バランスを崩して転倒、踏み外しに注意する。	強風で木が揺されると根本からの落石、枝の落下・飛来、倒木などが起き安いので崖下、大きな木の下や近くを避ける。	強風の場合は中止も考慮する。	野外全般	C			○		

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
53	個別危険事項	雨	早めに雨具を着用・使用して体を濡らさないようにする。傘による目や顔などへの接触事故に注意を促す。ゆっくりと余裕を持った行動をするようにする。そのため、必要に応じて行程を短縮する。	足下が濡れて滑り安くなり、雨具により動作がぎこちなくなり、視界も狭くなることなどから様々な事故が起き安くなるので、行動全体をゆっくり運ぶ。衣服が濡れることによる動作の制約も大きくなることに注意。	降雨の状況を見定め、引き返し、中止などを考慮する。	野外全般・山道	C			○		
54	個別危険事項	落石	崖の下や林道の切り土面下など落石の危険がある箇所は上に注意しながら速やかに通過する。	強風時で木が揺れている時などは特に発生しやすい。つづら折れの道などでは、下の道に落石を落とさないように注意。		野外全般・山道	C			○	○	
55	個別危険事項	倒木	枯れている木や腐っている木などが強風などで倒れる危険があることを常に意識する。	倒木が発生した時に、その倒木に倒れかかられて隣接する木が倒れる場合があることに留意。		野外全般・山道	C			○	○	○
56	個別危険事項	枝跳ね	後ろの人に声をかけて注意を促すとともに、跳ねないように押さえるなど協力して、枝跳ね事故を防止する。	前の人の通過により後ろの人に枝が跳ねるのを防ぐことを意識させ、協力して行動することの重要性を認識してもらう。	グループ行動での注意点を意識してもらえるようにリードする。	野外全般・山道	C	○	○			○
57	個別危険事項	枝の落下	枝の落下に注意を払い、強風時には枝の落下が予想される位置での解説、休憩、昼食など長時間とどまる行動を避ける。	強風時に起きやすいが、風が無くても突然落下してくる場合もあることに留意。	林内作業活動においてはヘルメットの着用に心がける。	野外全般	C			○		○
61	個別危険事項	ヤマビル	ヤマビル生息地域では、短靴ではなく、くるぶし以上の靴、靴下を二重に、ズボンの裾を上靴下の中に入れ、皮膚にヤマビルが侵入しにくいスタイルを推奨する。靴などに食塩水、忌避剤等の使用も有効。吸血された場合はきれいな水で洗い絆創膏を貼る。	ヤマビルは湿っている地面、落ち葉の層などに居るので、足下からの侵入を防ぐ。明るい色の服装だと気づき安い。参加者相互の監視体制による早期発見と除去が有効。吸血時に血液凝固を防ぐ物質を出すので、吸血部の地を少し押し出すと良い。清澄山系から清和地域に拡大中。	コースの中で湿っていて落ち葉の積もっている場所での解説を避けるなど、ヤマビルのいるような場所で足を止めない。	野外全般・山道	C	○	○			○
62	個別危険事項	マムシ・ヤマカガシ等毒蛇	思いもかけない場所に居ることがあるので注意。発見したら、速やかに離れるとともに他の人に知らせる。万が一噛まれた場合は救急車を要請。噛まれた後には毒が全身に回らないように激しい運動はしない。	人間が心地良いと感じる場所に居たりすることがあることに留意。中には毒蛇を見たことがない人(特に子供や若人)も多くなっているので注意を喚起する。	ポイズンリムーバーを持参していれば毒を吸い出す。知らないため気にせず近づくと人がいることに留意。	野外全般・山道	C	○	○			○
63	個別危険事項	イノシシ	イノシシを発見した場合は他の人に知らせ、ゆっくりと後退する形で遠ざかるように行動。背中をイノシシに見せるような形での行動はイノシシを興奮させて襲ってくる場合があるので避ける。	突然の遭遇が最も危険。遭遇した場合は落ち着いて行動。ビックリしての転倒、転落などに注意。生息域は南房総地域から北総地域に広がっている。	2012. 1.8午前9時半頃に鴨川市の関東ふれあいの道でイノシシと遭遇したハイカーが襲われてけがをした事例あり。生息密度が高い南房総地域では鈴などを携帯して相手に人間の存在を知らせることも考慮。	野外全般・山道	C					○
64	個別危険事項	マダニ	春から秋の活動期にかけてはマダニに噛まれないように肌の露出を避ける服装(長袖、長ズボン)を心がける。	マダニが媒介するウイルス感染を防ぐため、マダニに噛まれないことを心がける。野外活動の後には風呂に入り体を点検。マダニが食いついている場合は無理に剥がさず医者に行くように説明。	明るい色の服装だとマダニに気が付き安く推奨。マダニがしっかりと皮膚に食いつくまで1日程度かかる場合もあり、風呂は非常に有効。	野外全般・山道	C					○
65	個別危険事項	ツタウルシ・ハゼ等かぶれる植物やトゲのある植物	適切なアドバイスをいかぶれ事故やトゲによるけがに遭わないよう注意する。	適切なアドバイスによる注意喚起が重要。危険な植物に気を取られての転落・転倒等にも留意。	下見時に除去できれば除去しておく。	野外全般・山道	C					○

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
66	個別危険事項	木橋・吊り橋	年数の経っている木橋・吊り橋は一人ずつ渡ることを原則とする。橋の上で立ち止まらずに連続して渡る場合は前の人が2/3以上進んだら次の人が渡り始める。橋の揺れが大きくなった場合は収まるまで少し待つ。	年数が経っている木橋等は壊れる危険があるので一人ずつ渡ることを原則とするが、橋の長さの2/3の間隔を置けば、一人が橋の中央に居る時の荷重を越えないので次の人が渡り始めて良い。揺れは共振現象により崩落の危険性が高まるので収まるまで待つ。	安全そうに見える木橋や吊り橋でもふざけて皆で揺らすことは最も危険。かつて丹沢で子供達が揺らして崩落した事故あり。	野外全般・山道	C				○	
67	個別危険事項	トンネル	トンネル内は暗く、水溜まりができていたり、ぬかっけていて滑りやすい場所が合ったりするので、リーダーが適切に誘導しゆっくり行動する。ランプがあると便利なことも多い。	トンネル内はいきなり暗くなるので目が慣れるまでゆっくり行動する。素掘りのトンネルでは天井、側壁からの落石、落盤の危険も考慮して安全と思われるコース取りに努める。	トンネルの安全度の判断は難しく、雨宿りなどに使う場合も危険があることに留意する。	野外全般・山道	C				○	
68	個別危険事項	安全柵・ロープ等	谷側の安全柵や支柱、ロープ・鎖などに寄りかかったり、掴んで体重をかけたりしない。但し、よろけたりと緊急の場合は利用することはやむを得ないが、緊急時のみ、かつバランス維持程度で利用。体重をかけない。	設置されている安全柵やロープは老朽化したり根元が安定していない場合が多いので体重をかけるような使い方はしない。あくまで視線誘導のためとして取り扱う。	一見、安全なように見えても、谷側の構造物は視線誘導のためと考える。	野外全般・山道	C	○	○			

FIC野外活動・行事安全マニュアル【共通基本事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
1	全体	安全最優先	FICの活動・行事では常に安全を最優先として判断・行動する。	安全のためには「中止・あきらめる」を選択する勇気を持つ。これをスタッフが共有する。	中止の時の代替プログラムがあると良い。	全て	A					
2	全体	危険の想定	想定できていない危険には対処が困難。常に周囲の状況、その時々によどのような危険があり得るのかを想定するように努める。	自らの知識・経験に加えてFICのヒヤリハット、ニュースになった事故例などから想定できる危険の範囲を広げる。	事故での裁判例などにも注意を払う。	全て	A					
3	全体	危機対応とマニュアル	実際の危機においては、状況に応じてマニュアルと違った対応、場合によっては反対の行動が必要になることがあることを理解し、パニックに陥らず適切に対処する。	ある状況における安全確保の手段が別のリスクを高める場合もあるので、全体のリスクバランスを総合的に判断することが重要。最善の対応が時間を要する場合、最善でなくても、より短時間でとれる行動が安全を確保し、被害を最小限にする場合も多い。	どのような状況でもその状況を総合的に判断してベターな選択をする判断力を日頃から養う。	全て	A					
4	全体	ヒューマンエラー	事故の大部分はヒューマンエラー（人為ミス）から起こることを自覚する。	活動・行事の内容を安全対策の面から常に点検する。参加者全員が自分と全体の安全を確保するよう行動するように注意を促す。	参加者全員に自己責任の自覚を促す。	全て	A		○			
5	全体	ヒューマンエラー2	思い込みによる錯覚、勘違いは何人といえども起こりうる。どんなに経験知識が豊富なベテランでも錯覚、勘違いから逃れられないことを理解する。	錯覚、勘違いに本人は全く気がついていないので、疑問を感じたり、より良い対策・方策を思いついたスタッフはそれをリーダーに遠慮無く伝える。FICではスタッフが気軽に助言しあえる雰囲気構築を常に心掛ける。	スタッフや参加者から助言を受けたリーダーは、その助言を採用しない場合は、できるだけその理由を説明するように心掛ける。この態度が自らの思い込みによる危険を避けることにつながる。	全て	A		○			
50	終了後	事後検討会	一般参加者を対象に行った行事では、原則として事後検討会を当該行事参加スタッフで実施する。	行事遂行過程で起こった、あるいは気が付いたヒヤリハットの指摘と確認、その解決策、そのほか当該行事から今後の行事遂行に参考になる事項の抽出と確認などを話し合い、必要に応じて報告書を作成する。	ヒヤリハットや今後の参考になりそうとして検討された事項について、ネットその他で参考事例を参照してより理解を深め、今後に活かすように努める。	全て	B					
69	事故発生時の対応	事故発生時の対応	対応の順番は状況に応じて適切に判断 ① 事故者の救急救命活動 ② 緊急支援要請（消防＝119番 警察＝110番） ③ 事故者以外のメンバーの安全確保 ④ FICメンバーの適切な役割分担、役割にしたがった行動 ⑤ 安全担当ほか上記連絡先への適切な連絡 ⑥ 事故者連絡先（家族等）への連絡 ⑦ バス会社への連絡（必要な場合）	事故発生時期第1に現場での対応に専念することを原則とする。 その上で「FIC緊急時対応」表を参照して次の通り連絡する。 ① 緊急事態に応じて適切な担当者に連絡する。 ② 緊急連絡を受けた者は、更に連絡が必要と判断される担当者に連絡。 ③ 緊急連絡発信者は連絡が済み次第、現場での対応に専念することを原則とし、その後の状況に応じて追加情報を発信する。	事故の緊急性が低い場合は、 ① 応急手当のみとすることも可。 ② 事故の内容が些細な場合に大げさに取り扱うことは事故者も望まないので本人の思いを尊重する。	全て	A					

FIC野外活動・行事安全マニュアル【野外全般関係事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
6	全体	リーダーとスタッフ	一般参加者を対象とする活動・行事ではリーダーとスタッフ、そして各自の役割を決めておく。	活動・行事が想定外の事態に遭遇した場合の最終判断はリーダーが行うが、リーダーはスタッフの意見を聞き、参考にする。スタッフはその場に応じた適切な意見をリーダーに伝える。	リーダーは活動・行事に応じて知識・経験の深いスタッフの参加を求める。	野外全般	A					
7	計画と下見	計画(企画)立案	計画(企画)立案に当たっては、最新の状況を確認した上での立案に努める。	立案者にとって慣れ親しんだ場所・コースであっても時間の経過により思いがけない変化が生じている場合があることに留意。	ネットや現地に詳しい人からの情報の活用も有効。	野外全般	B				○	○
8	計画と下見	下見の目的	一般参加者を対象とする計画ではその実施方法(時間、実施可能人数(参加者とそれに応じたスタッフ必要人数)、季節、コースの難易度、エスカープルートの有無、等)を確認し、必要に応じて計画を見直す。併せて参加スタッフが現地状況を共有する。	最初の計画にこだわることなく、下見で判明した現地状況に応じて柔軟に計画変更する。	季節毎の実施可能性も確認できると次に繋がる。オブザーバーは安全確保に寄与のできる場合が多いのでできる限り活用。	野外全般	A					
9	計画と下見	実施時期	募集案内を出す前、及び本番に近い時期の2回を原則とするが、既に現地の詳細が分かっている場合はどちらかを省略することも可。	既知の場合でも省略せずにどちらかの下見を少人数で行うことは、十分知っている場所といえども現地状況の的確な把握に有効。	現地近くの人から直前の状況が得られれば有効に活用する。	野外全般	B					
10	計画と下見	参加対象者の想定	原則として募集案内前の下見または計画(企画立案時)においてコースの難易度を検討し、参加が可能な体力・経験・知識等を想定して募集案内に反映する。	一般参加者は多岐に渡るが中心となる年齢層、体力等を想定する。	想定からはずれる参加者が予想される場合は対応策を検討。	野外全般	A					
11	計画と下見	危険箇所の確認と対応策の決定	急な斜面や階段、滑りやすい岩場、躓きやすい木の根等危険箇所を確認し、対応方法を決定する。	危険箇所は雨、風等の天候、参加者の体力・知識・経験等によって変化することを考慮する。	悪天時の下見も有効。	野外全般・山道	B			○	○	
12	計画と下見	道迷い防止	迷いそうな場所を現地及び地図上で確認し、必要に応じて下見時に目印を着ける。かつ、状況をスタッフが共有する。	目印には倒木、木の枝等自然物を利用すると除去を省略できることが多い。	カラーテープ、ひもなどを使った場合残すか除去かを適切に判断。	野外全般・山道	B				○	
13	計画と下見	携帯電話	下見においてできる限り携帯電話の通話の可否を場所毎に確認。	通信会社により違うので、実際に使用する携帯電話での確認が必要。	通話の場所毎の可否を位置図に示せると良い。	野外全般・山道	B				○	
14	計画と下見	安全チェックリスト	下見に基づいて起こり得る危険を予測し安全チェックリストを作成する。特に、下見時に比して本番では多数が参加することによる状況変化に留意。	作成された安全チェックリストを参加スタッフが内容を点検し、最終版の内容を共有する。	多くのFIC会員から参考意見がみらえるとなお良い。	野外全般	A					
15	参加者・募集・受付	募集案内	参加者がコースの難易度を理解し、自分の体力と経験を勘案して応募できるよう工夫をする。	他のコースと比較できる標準的な表現とそのコース自体の特徴を示す表現の両方が記載されたと分かりやすい。	全ての企画においてコースの難易度を簡潔に情報提供するように努める。	野外全般	B		○			
16	参加者・募集・受付	受付案内	参加者が適切に準備できるよう必要な内容を簡潔に知らせる。	情報量が多すぎると返って注意を引かないことを十分に考慮。	詳細情報をHP等で知らせる。	野外全般	B		○			
17	参加者・募集・受付	服装(全体)	実施する場所・季節・コースに応じた適切な服装(長袖・長ズボン)を案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	体の露出部分が少なくなるような服装を推奨。ヤマビル、マダニ対策など明るい色の服装が望ましい。		野外全般	B		○			
18	参加者・募集・受付	服装(帽子)	落枝等上部からの落下物、横枝等につけた場合に頭部保護に重要な役割を果たすことを説明し、極力かぶるように案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	忘れた場合は、タオル等の活用など、何らかの方法で頭部を保護することを勧める。	落石等の危険のある場所ではヘルメットも考慮。	野外全般・山道	B	○	○			

18	参加者・募集・受付	服装(帽子)	落枝等上部からの落下物、横枝等につけた場合に頭部保護に重要な役割を果たすことを説明し、極力かぶるように案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	忘れた場合は、タオル等の活用など、何らかの方法で頭部を保護することを勧める。	落石等の危険のある場所ではヘルメットも考慮。	野外全般	B	○				
19	参加者・募集・受付	服装(上着)	脱ぎ着し易い上着を推奨する。	体温調節し易い上着を推奨。		野外全般	B	○				
20	参加者・募集・受付	服装(手袋)	極力使うことを推奨。冬期等気温の低い季節には暖かいものを。バランスの維持、転倒時の危険回避等、手をポケットに入れない行動を呼びかける。	鋭い岩角、トゲある樹木等を掴む場合があることを考慮して掌側は摩擦が大きくトゲなどを通さない素材でできているものを推奨。		野外全般・山道	B	○				
21	参加者・募集・受付	服装(ズボン)	長ズボンで歩きやすく、繊維が密なものを推奨。	トゲ、岩角に擦れても表面が密だとひっかき傷ができにくく皮膚を保護する効果が大。		野外全般・山道	B	○				
22	参加者・募集・受付	服装(靴下)	ヤマビル生息地域ではくるぶし以上のものので重ね履きを推奨。	ヤマビル対策として外側の靴下でズボンの裾を覆う履き方が有効。		野外全般・山道	B	○				
23	参加者・募集・受付	服装(靴)	軽登山靴を推奨。ヤマビル生息地域では足首まである深めの靴を推奨。	歩行場所が舗装道路、林道、公園など広く平坦な場所のみの場合は運動靴も可。		野外全般・山道	B	○				
24	参加者・募集・受付	持ち物(雨具)	必携を原則とする。野外全般・山道コースの場合はセパレーツタイプを推奨。	受付案内には持参するように記載しておく。		野外全般・山道	B	○				
25	参加者・募集・受付	持ち物(リュック)	極力両手が使える状態を推奨。	全くの野外未経験者の場合、肩掛けバック等で参加する場合もあるので注意。		野外全般・山道	B	○				
26	参加者・募集・受付	持ち物(杖、ストック)	野外全般・山道ではあると便利。	慣れないと返って危険な場合もあるので考慮。		野外全般・山道	C	○				
27	参加者・募集・受付	持ち物(敷物)	昼食場所が山の中の場合は持参を推奨。	ヒル・マダニ対策としても重要、数人での使用も可。	持参しなかった参加者がいた場合は持参した参加者に協力を要請。	野外全般・山道	C	○				
28	現地まで	集合場所	集合場所は分かりやすく、バス等使用車両に安全に乗り降りできる場所を選ぶ。現地集合の場合は、分かりやすく広く、交通事故に遭いにくい場所を選ぶ。	自動車道を横断しない、段差が無い広い場所を選ぶ。友人との再会などで注意が散漫になりがちなことに注意する。	見通しが良い場所だと、参加者が集まる様子も確認できる。	野外全般	B	○				
29	現地まで	健康確認	目的地までのバスの中で参加者に自身の健康確認を呼びかけ、不調の場合は申告してもらい、場合によってはバスで待機してもらう。	コースの概要、難易度の説明と併せて行い、参加者が自らの体調と比較出来るように配慮。	不調を申告した参加者に対して別メニューの用意があると良い。	野外全般・山道	A	○				
30	現地まで	持ち物確認	当日必要な装備(帽子、手袋、靴等)、持ち物(昼食、飲み物、雨具、敷物等)の確認を呼びかける。	忘れた参加者がいる場合は、他の参加者から借りる等適宜対応。	若干の予備があると便利。	野外全般・山道	C	○				
31	現地まで	行程説明	当日の行程の概要を説明。	あらかじめ行程を知ってもらうことで各自、自分の準備ができる。		野外全般・山道	C				○	
32	現地まで	注意点の説明	当日の活動・行事における注意点を説明。トイレの箇所は重要なので必ず説明。	FICメンバーには自明のことでも参加者にとっては気が付いていないことも多いことに留意。	多すぎると印象に残らないので重点項目を選定。	野外全般・山道	C				○	○
33	現地	準備運動	身体だけでなく心の準備にもなるので適切に実施。	バス等での現地までの移動で体が硬くなっていることも考慮する。		野外全般	B	○				
34	現地	班分け	FICの一般参加者対象活動・行事では、安全管理は班毎に行うことを原則とする。	班の人数はFICの野外講座では10人程度を目安にする。人数があまり多くなると掌握が難しくなることに留意。	参加者の経験・体力等を蓄積して安全確保に活用できるように記録整備する。	野外全般	C	○				

35	現地	班行動	一定の間隔での班別行動となるので、常に前後の班の進行に注意を払い、つかず離れずの行動を取る。極力、前の班の最後尾が視認できる距離を維持する。	下見で決定した時間を常に意識し、原則として先頭の班が時間管理に当たり、ずれてきた場合は後続の班がリレー方式で先頭班までその旨を伝える。	携帯電話が使える場所では連絡への活用も効果的。	野外全般・山道	B						
36	現地	班行動(参加者の協力)	班の中に信頼できる参加者がいる場合は、できる範囲で協力してもらう。班の最後尾で班員の確認など。	一般参加者は客ではあるが、役割を快く引き受けていただける場合も多い。	信頼できる参加者情報の蓄積。	野外全般・山道	C		○				
37	現地	説明ポイント	説明、解説は安全な場所で行う。注意場所(落石、落枝、滑落、転倒、有毒動植物等)	前の班の移動を待つための待機場所の安全にも留意する。参加者の崖下への覗き込み行動に注意。		野外全般・山道	C					○	○
38	現地	説明ポイント2	解説の場所では上部からの落下物の危険が無いか注意し、参加者の位置などに配慮する。	2012年11月に大垣市で説明を聞いている最中に杉の枝が落ちてきて小学1年生の女子が死亡する事故が発生している。	大垣市の事故ではヘルメットを着用していなかったことからヘルメットの着用の有無が問題になっている。当日は強風。	野外全般	A					○	○
39	現地	危険箇所	危険な箇所の状況に応じて適切な行動を取る。足下が危険な場合(急傾斜、滑り安い・躓きやすい、滑落の恐れなど)はゆっくり通過。頭上が危険な場合(落石、落枝、土石流など)は速やかに通過することを原則とする。	足下の危険と頭上の危険が重なった場所では足下の危険回避を優先し、滑落・転倒などの防止のためにゆっくり進むことを原則とする。参加者の状況から頭上の危険度が高くなる場合は引き返すことも考慮。	参加者の経験・体力、その日の体調をできる限り掌握しておく。	野外全般・山道	B		○			○	
40	現地	注意点の声かけ	現地の状況に応じた注意事項を声かけする。(横枝、濡れた岩、落ち葉の集積、地表に出ている根、掴みやすい所にある枯れ木、枝はね)など	班リーダーや経験者には当然の事項でも参加者には気が付かない点があることを考慮。うるさすぎないことにも配慮。	参加者の状況に応じた声かけができるように参加者のデータを蓄積。	野外全般・山道	C		○				
41	現地	すれ違い、追い越され、追い抜き	コースが片斜面になっている場所では対抗者としてすれ違う場合、及び後ろから来た早い人に追い越してもらった場合は山側で待機する。逆に対抗者が待つてくれる場合及び同じ方向の人を追い越す場合は待っていてくれる人との接触を避け慎重に谷側を通過する。班に分かれての行動であっても、FIC全グループとして山側待機、谷側通過の原則を徹底する。	待機する方が不安定な状態になるので、すれ違う人、追い越す人との接触でバランスを崩しても谷に転落しにくい山側で待機することを原則とする。逆に、こちらが待機している人の脇を通過する時は谷側を通過することを原則とする。但し、相手が谷側で待機している場合は、相手に先に通過してもらうよう依頼するか、こちらが先に通過する場合は相手と接触しないように特に注意を払う。すれ違う場合には、登り優先、人数の少ない方優先の原則に留意。	班長が班員に待機場所の声をかける時に「山側の右あるいは左」のように「山側」という言葉を必ず入れるようにすることが参加者に待機場所の原則が理解されて良い。	野外全般・山道	B	○	○				
42	現地	休憩	野外行動では原則として1時間に1回程度の間隔で休憩を取る。休憩時間は、水分補給、糖分補給、服装の調節(上着、防寒着等の着脱)を行える時間とする。概ね5分～10分程度。休憩により各班の間隔が離れてしまわないように留意。下見時に共通の休憩場所を決めておくことも効果的。	広めの場所での説明・解説時を休憩と兼用することも効果的で参加者に「水、糖分、衣服調節」などの呼びかけをした上で解説に入る。この方法だと休憩回数が多くなり、自分の状況に応じて必要な処置を執れる。コース途中で全部の班を集めての解説ポイントを設定すると、休憩との兼用で利点が多い。	班リーダーが給等を班員に配って糖分補給を促すことも効果的。ただし、子供の場合は食物アレルギーのリスクがあるので原則として食べ物は配らない。	野外全般・山道	A	○	○				
43	現地	参加者の行動	野外では「走らない」「あわてない」「振り回さない」を厳守。	子供は特に注意。下りで走るとは厳禁。	スタッフも緊急時以外は走らない。	野外全般・山道	B	○	○				
44	現地	参加者の行動 2	原則として、林道などの山側急斜面側、下が急勾配の谷側近くを歩かず中央を歩く。	落石、転落の危険をできるだけ回避。斜面にある植物の解説を行う場合は参加者の安全に配慮。	常に参加者の行動に注意を払う。	野外全般・山道	C	○	○				
45	現地	参加者の行動 3	急傾斜や足場の狭い場所で参加者同士で手を貸しあう行動に注意を払う。	手を貸さなければいけない状況では、極力、スタッフが自分の体制を十分に確保したうえで慎重に行く。	自力でのゆっくり、確実な行動を促し、あなたが来るまで待っているとのサインを送る。	野外全般・山道	C	○	○				

46	現地	参加者の危険な行動	参加者がコース外に出る、ふざけて石を投げたり、木にぶら下がったり、枝を振り回すなどの危険な行動を取った場合は速やかに制止する。	参加者の意識として、これくらいという考えでの行動と経験知識がないため全く危険と思わない場合の2つが考えられるので、状況からふさわしい制止方法を考慮。	難しいが、日頃から参加者の性格を把握するように努める。	野外全般・山道	C	○	○			
47	現地	昼食	広くて安全な場所を選定。近くにトイレがあると良い。野外で用を足す時は周辺の人に声をかけるように要請する。昼食後の出発時の人員確認を怠らない。	広い場所が確保できず、班毎となる場合は各班の連絡を密にする。野外でのトイレでは急斜面等危険な場所、遠くへ行かないように要請する。		野外全般・山道	B					
48	現地	トイレ	建物のトイレが無く、野外となる場合は、近くの人に「用を足す」旨を必ず言うってから班を外れること、伝言を聞いた人はそれを班リーダーに伝えるように参加者に伝えておく。 昼食場所などでは、用を足す区域をあらかじめ参加者に伝えるようにする。	用を足しに班から外れたことに気が付かずに行方不明になったり、転落事故に遭う可能性はかなり高いので特に注意が必要。 安全に用が足せる場所を下見時に確認しておく。 トイレを我慢しての水分不足にも十分注意。		野外全般・山道	B					
49	現地	降車場所	足下がしっかりとっていて、ゆっくり降車でき、すぐに自動車道を選定。途中のトイレ休憩時も同様。	長時間乗車で体が硬くなり、降車時によろけがちで、バスの乗降時は事故の確率が高く慎重な対応を心がける。	スタッフが降車口の下で待機して、よろけた場合に介助できる体制を取ると良い。	野外全般	B		○			
51	個別危険事項	雷	雷に遭遇した時は、森林の中に逃げ込み、背の高い木から離れる。野原では姿勢を低く保ち、自分が突起物にならないようにする。東屋等に避難する場合は壁や柱から離れた位置を取る。	落雷は突起物に落ちる場合が大半。突起物(背の高い木、飛び出した岩など)から離れる、また、野原や田畑では立っている自分と自分が突起物になってしまうので、森の中に避難する。近くに樹林が無い場合は低い姿勢(座る、しゃがむ)を保つ。東屋などに避難する場合は壁や柱から少し離れる。東屋に落雷した電流が壁や柱を伝わって地面に流れるため感電しないように。	雷は突然発生する場合もあるので予測が難しいが、当日の気象情報に注意し、雷との遭遇を避けるように留意する。	野外全般	C		○			
52	個別危険事項	強風	強風時は落下物が増えるので上方に注意を払うとともに、バランスを崩して転倒、踏み外しに注意する。	強風で木が揺すられると根本からの落石、枝の落下・飛来、倒木などが起き安いので崖下、大きな木の下や近くを避ける。	強風の場合は中止も考慮する。	野外全般	C		○			
53	個別危険事項	雨	早めに雨具を着用・使用して体を濡らさないようにする。傘による目や顔などへの接触事故に注意を促す。ゆっくりと余裕を持った行動をするようにする。そのため、必要に応じて行程を短縮する。	足下が濡れて滑り安くなり、雨具により動作がぎこちなくなり、視界も狭くなることなどから様々な事故が起き安くなるので、行動全体をゆっくり運ぶ。衣服が濡れることによる動作の制約も大きくなることに注意。	降雨の状況を見定め、引き返し、中止などを考慮する。	野外全般・山道	C		○			
54	個別危険事項	落石	崖の下や林道の切り土面下など落石の危険がある箇所は上に注意しながら速やかに通過する。	強風時で木が揺れている時などは特に発生しやすい。つづら折れの道などでは、下の道に落石を落とさないように注意。		野外全般・山道	C		○	○		
55	個別危険事項	倒木	枯れている木や腐っている木などが強風などで倒れる危険があることを常に意識する。	倒木が発生した時に、その倒木に倒れかかられて隣接する木が倒れる場合があることに留意。		野外全般・山道	C		○	○	○	
56	個別危険事項	枝跳ね	後ろの人に声をかけて注意を促すとともに、跳ねないように押さえるなど協力して、枝跳ね事故を防止する。	前の人の通過により後ろの人に枝が跳ねるのを防ぐことを意識させ、協力して行動することの重要性を認識してもらう。	グループ行動での注意点を意識してもらいようにリードする。	野外全般・山道	C	○	○			○
57	個別危険事項	枝の落下	枝の落下に注意を払い、強風時には枝の落下が予想される位置での解説、休憩、昼食など長時間とどまる行動を避ける。	強風時に起きやすいが、風が無くても突然落下してくる場合もあることに留意。	林内作業活動においてはヘルメットの着用に心がける。	野外全般	C		○			○
58	個別危険事項	疲労	休憩して水分補給と糖分の補給を行う。	参加者の疲労の予測は難しいが、適度な休憩・水分と糖分補給を心がける。また、服装による温度調節にも気を配り、適切な服装(服の脱ぎ着)をアドバイスする。	行動中の会話などで疲労傾向を把握し、休憩などの対応を早めに実施。	野外全般・山道	B	○	○			

59	個別危険事項	滑落・転落・転倒	参加者の状況を把握して適切にアドバイス。ゆっくり行動することで防止に繋げる。	疲労時には起きやすいことを常に意識。狭い、急峻、崖地などでは適切なアドバイスとゆっくり行動を実施。	危険箇所を通過した気のゆるみからなんでもない箇所でも起こる場合もあることに留意。	野外全般・山道	B	○	○		○	
60	個別危険事項	スズメバチ・アシナガバチ	①遭遇した場合は手で払ったり、走ったりなどの急激な行動は厳禁。ゆっくり後退して離れる。 ②初夏から晩秋までのスズメバチの活動時期には、原則として黒っぽい衣服(帽子を含む、)を避ける。また、香水、匂いの強い化粧品、クリーム等を使用しない。 スズメバチ・アシナガバチについては事故例も多く、被害も甚大なので更に詳しい情報を設ける。	千葉県ではおおむね5月～12月上旬頃迄が活動期。急激な行動、黒い色や強い匂いに刺激を受けて攻撃してくることに留意。万が一刺された場合はポイズンリムーバー等で吸引。ショック症状が起きる場合は救急車を要請。	下見時に巣を見つけた場合はできるだけ回避ルートを取るようになる。可能ならば駆除しておく。	野外全般	A	○	○			○
61	個別危険事項	ヤマビル	ヤマビル生息地域では、短靴ではなく、くるぶし以上の靴、靴下を二重に、ズボンの裾を上靴の靴下の中に入れ、皮膚にヤマビルが侵入しにくいスタイルを推奨する。靴などに食塩水、忌避剤等の使用も有効。吸血された場合はきれいな水で洗い絆創膏を貼る。	ヤマビルは湿っている地面、落ち葉の層などに居るので、足下からの侵入を防ぐ。明るい色の服装だと気づきやすい。参加者相互の監視体制による早期発見と除去が有効。吸血時に血液凝固を防ぐ物質を出すので、吸血部の地を少し押し出すと良い。清澄山系から清和地域に拡大中。	コースの中で湿っていて落ち葉の積もっている場所での解説を避けるなど、ヤマビルのいそうな場所で足を止めない。	野外全般・山道	C	○	○			○
62	個別危険事項	マムシ・ヤマカガシ等毒蛇	思いもかけない場所に居ることがあるので注意。発見したら、速やかに離れるとともに他の人に知らせる。万が一噛まれた場合は救急車を要請。噛まれた後には毒が全身に回らないように激しい運動はしない。	人間が心地良いと感じる場所に居たりすることがあることに留意。中には毒蛇を見たことがない人(特に子供や若人)も多くなっているので注意を喚起する。	ポイズンリムーバーを持参していれば毒を吸い出す。知らないため気にせず近づくと人がいることに留意。	野外全般・山道	C	○	○			○
63	個別危険事項	イノシシ	イノシシを発見した場合は他の人に知らせ、ゆっくりと後退する形で遠ざかるように行動。背中をイノシシに見せるような形での行動はイノシシを興奮させて襲ってくる場合があるので避ける。	突然の遭遇が最も危険。遭遇した場合は落ち着いて行動。ビックリしての転倒、転落などに注意。生息域は南房総地域から北総地域に広がっている。	2012. 1.8午前9時半頃に鴨川市の関東ふれあいの道でイノシシと遭遇したハイカーが襲われてけがをした事例あり。生息密度が高い南房総地域では鈴などを携行して相手に人間の存在を知らせることも考	野外全般・山道	C					○
64	個別危険事項	マダニ	春から秋の活動期にかけてはマダニに噛まれないように肌の露出を避ける服装(長袖、長ズボン)を心がける。	マダニが媒介するウイルス感染を防ぐため、マダニに噛まれないことを心がける。野外活動の後には風呂に入り体を点検。ダニが食いついている場合は無理に剥がさず医者に行くように説明。	明るい色の服装だとダニに気が付きやすく推奨。ダニがしっかり皮膚に食いつくまで1日程度かかる場合もあり、風呂は非常に有効。	野外全般・山道	C					○
65	個別危険事項	ツタウルシ・ハゼ等かぶれる植物やトゲのある植物	適切なアドバイスを行いかぶれ事故やトゲによるけがに遭わないよう注意する。	適切なアドバイスによる注意喚起が重要。危険な植物に気を取られての転落・転倒等にも留意。	下見時に除去できれば除去しておく。	野外全般・山道	C					○
66	個別危険事項	木橋・吊り橋	年数の経っている木橋・吊り橋は一人ずつ渡ることを原則とする。橋の上で立ち止まらずに連続して渡る場合は前の人が2/3以上進んだら次の人が渡り始める。橋の揺れが大きくなった場合は収まるまで少し待つ。	年数が経っている木橋等は壊れる危険があるので一人ずつ渡ることを原則とするが、橋の長さの2/3の間隔を置けば、一人が橋の中央に居る時の荷重を超えないので次の人が渡り始めて良い。揺れは共振現象により崩落の危険性が高まるので収まるまで待つ。	安全そうに見える木橋や吊り橋でもふざけて皆で揺らすことは最も危険。かつて丹沢で子供達が揺らして崩落した事故あり。	野外全般・山道	C				○	

67	個別危険事項	トンネル	トンネル内は暗く、水溜まりができていたり、ぬかっけていて滑りやすい場所が合ったりするので、リーダーが適切に誘導しゆっくり行動する。ランプがあると便利なことも多い。	トンネル内はいきなり暗くなるので目が慣れるまでゆっくり行動する。素堀りのトンネルでは天井、側壁からの落石、落盤の危険も考慮して安全と思われるコース取りに努める。	トンネルの安全度の判断は難しく、雨宿りなどに使う場合も危険があることに留意する。	野外全般・山道	C					○	
68	個別危険事項	安全柵・ロープ等	谷側の安全柵や支柱、ロープ・鎖などに寄りかかったり、掴んで体重をかけたりしない。但し、よろけたりと緊急の場合は利用することはやむを得ないが、緊急時のみ、かつバランス維持程度で利用。体重をかけない。	設置されている安全柵やロープは老朽化したり根元が安定していない場合が多いので体重をかけるような使い方はしない。あくまで視線誘導のためとして取り扱う。	一見、安全なように見えても、谷側の構造物は視線誘導のためと考える。	野外全般・山道	C	○	○				

FIC野外活動・行事安全マニュアル【山道関係事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
11	計画と下見	危険箇所の確認と対応策の決定	急な斜面や階段、滑りやすい岩場、躓きやすい木の根等危険箇所を確認し、対応方法を決定する。	危険箇所は雨、風等の天候、参加者の体力・知識・経験等によって変化することを考慮する。	悪天時の下見も有効。	野外全般・山道	B			○	○	
12	計画と下見	道迷い防止	迷いそうな場所を現地及び地図上で確認し、必要に応じて下見時に目印を着ける。かつ、状況をスタッフが共有する。	目印には倒木、木の枝等自然物を利用すると除去を省略できることが多い。	カラーテープ、ひもなどを使った場合残すか除去かを適切に判断。	野外全般・山道	B				○	
13	計画と下見	携帯電話	下見においてできる限り携帯電話の通話の可否を場所毎に確認。	通信会社により違うので、実際に使用する携帯電話での確認が必要。	通話の場所毎の可否を位置図に示せると良い。	野外全般・山道	B				○	
18	参加者・募集・受付	服装(帽子)	落枝等上部からの落下物、横枝等につづけた場合に頭部保護に重要な役割を果たすことを説明し、極力かぶるように案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	忘れた場合は、タオル等の活用など、何らかの方法で頭部を保護することを勧める。	落石等の危険のある場所ではヘルメットも考慮。	野外全般・山道	B	○	○			
20	参加者・募集・受付	服装(手袋)	極力使うことを推奨。冬期等気温の低い季節には暖かいものを。バランスの維持、転倒時の危険回避等、手をポケットに入れない行動を呼びかける。	鋭い岩角、トゲある樹木等を掴む場合があることを考慮して掌側は摩擦が大きくトゲなどを通さない素材でできているものを推奨。		野外全般・山道	B		○			
21	参加者・募集・受付	服装(ズボン)	長ズボンで歩きやすく、繊維が密なものを推奨。	トゲ、岩角に擦れても表面が密だとひっかき傷ができにくく皮膚を保護する効果が大。		野外全般・山道	B		○			
22	参加者・募集・受付	服装(靴下)	ヤマビル生息地域ではくるぶし以上のものので重ね履きを推奨。	ヤマビル対策として外側の靴下でズボンの裾を覆う履き方が有効。		野外全般・山道	B		○			
23	参加者・募集・受付	服装(靴)	軽登山靴を推奨。ヤマビル生息地域では足首まである深めの靴を推奨。	歩行場所が舗装道路、林道、公園など広く平坦な場所のみの場合は運動靴も可。		野外全般・山道	B		○			
24	参加者・募集・受付	持ち物(雨具)	必携を原則とする。野外全般・山道コースの場合はセパレーツタイプを推奨。	受付案内には持参するように記載しておく。		野外全般・山道	B		○			
25	参加者・募集・受付	持ち物(リュック)	極力両手が使える状態を推奨。	全くの野外未経験者の場合、肩掛けバック等で参加する場合もあるので注意。		野外全般・山道	B		○			
26	参加者・募集・受付	持ち物(杖、ストック)	野外全般・山道ではあると便利。	慣れないと返って危険な場合もあるので考慮。		野外全般・山道	C		○			
27	参加者・募集・受付	持ち物(敷物)	昼食場所が山の中の場合は持参を推奨。	ヒル・マダニ対策としても重要、数人での使用も可。	持参しなかった参加者がいた場合は持参した参加者に協力を要請。	野外全般・山道	C		○			
29	現地まで	健康確認	目的地までのバスの中で参加者に自身の健康確認を呼びかけ、不調の場合は申告してもらい、場合によってはバスで待機してもらう。	コースの概要、難易度の説明と併せて行い、参加者が自らの体調と比較出来るように配慮。	不調を申告した参加者に対して別メニューの用意があると良い。	野外全般・山道	A		○			
30	現地まで	持ち物確認	当日必要な装備(帽子、手袋、靴等)、持ち物(昼食、飲み物、雨具、敷物等)の確認を呼びかける。	忘れた参加者がいる場合は、他の参加者から借りる等適宜対応。	若干の予備があると便利。	野外全般・山道	C		○			
31	現地まで	行程説明	当日の行程の概要を説明。	あらかじめ行程を知ってもらうことで各自、自分の準備ができる。		野外全般・山道	C				○	
32	現地まで	注意点の説明	当日の活動・行事における注意点を説明。トイレの箇所は重要なので必ず説明。	FICメンバーには自明のことでも参加者にとっては気が付いていないことも多いことに留意。	多すぎると印象に残らないので重点項目を選定。	野外全般・山道	C				○	○

35	現地	班行動	一定の間隔での班別行動となるので、常に前後の班の進行に注意を払い、つかず離れずの行動を取る。極力、前の班の最後尾が視認できる距離を維持する。	下見で決定した時間を常に意識し、原則として先頭の班が時間管理に当たり、ずれてきた場合は後続の班がリレー方式で先頭班までその旨を伝える。	携帯電話が使える場所では連絡への活用も効果的。	野外全般・山道	B						
36	現地	班行動(参加者の協力)	班の中に信頼できる参加者がいる場合は、できる範囲で協力してもらう。班の最後尾で班員の確認など。	一般参加者は客ではあるが、役割を快く引き受けていただける場合も多い。	信頼できる参加者情報の蓄積。	野外全般・山道	C		○				
37	現地	説明ポイント	説明、解説は安全な場所で行う。注意場所(落石、落枝、滑落、転倒、有毒動植物等)	前の班の移動を待つための待機場所の安全にも留意する。参加者の崖下への覗き込み行動に注意。		野外全般・山道	C					○	○
39	現地	危険箇所	危険な箇所の状況に応じて適切な行動を取る。足下が危険な場合(急傾斜、滑り安い・躓きやすい、滑落の恐れなど)はゆっくり通過。頭上が危険な場合(落石、落枝、土石流など)は速やかに通過することを原則とする。	足下の危険と頭上の危険が重なった場所では足下の危険回避を優先し、滑落・転倒などの防止のためにゆっくり進むことを原則とする。参加者の状況から頭上の危険度が高くなる場合は引き返すことも考慮。	参加者の経験・体力、その日の体調をできる限り掌握しておく。	野外全般・山道	B		○			○	
40	現地	注意点の声かけ	現地の状況に応じた注意事項を声かけする。(横枝、濡れた岩、落ち葉の集積、地表に出ている根、掴みやすい所にある枯れ木、枝はね)など	班リーダーや経験者には当然の事項でも参加者には気が付かない点があることを考慮。うるさすぎないことにも配慮。	参加者の状況に応じた声かけができるように参加者のデータを蓄積。	野外全般・山道	C		○				
41	現地	すれ違い、追い越され、追い抜き	コースが片斜面になっている場所で対抗者とすれ違う場合、及び後ろから来た早い人に追い越してもらった場合は山側で待機する。逆に対抗者が待ってくれている場合及び同じ方向の人を追い越す場合は待っていてくれる人との接触を避け慎重に谷側を通過する。班に分かれての行動であっても、FIC全グループとして山側待機、谷側通過の原則を徹底する。	待機する方が不安定な状態になるので、すれ違う人、追い越す人との接触でバランスを崩しても谷に転落しにくい山側で待機することを原則とする。逆に、こちらが待機している人の脇を通過する時は谷側を通過することを原則とする。但し、相手が谷側で待機している場合は、相手に先に通過してもらいよう依頼するか、こちらが先に通過する場合は相手と接触しないように特に注意を払う。すれ違う場合には、登り優先、人数の少ない方優先の原則に留意。	班長が班員に待機場所の声をかける時に「山側の右あるいは左」のように「山側」という言葉を必ず入れるようにすることが参加者に待機場所の原則が理解されて良い。	野外全般・山道	B	○	○				
42	現地	休憩	野外行動では原則として1時間に1回程度の間隔で休憩を取る。休憩時間は、水分補給、糖分補給、服装の調節(上着、防寒着等の着脱)を行える時間とする。概ね5分～10分程度。休憩により各班の間隔が離れてしまわないように留意。下見時に共通の休憩場所を決めておくことも効果的。	広めの場所での説明・解説時を休憩と兼用することも効果的で参加者に「水、糖分、衣服調節」などの呼びかけをした上で解説に入る。この方法だと休憩回数が多くなり、自分の状況に応じて必要な処置を執れる。コース途中で全部の班を集めての解説ポイントを設定すると、休憩との兼用で利点が多い。	班リーダーが飴等を班員に配って糖分補給を促すことも効果的。ただし、子供の場合は食物アレルギーのリスクがあるので原則として食べ物は配らない。	野外全般・山道	A	○	○				
43	現地	参加者の行動	野外では「走らない」「あわてない」「振り回さない」を厳守。	子供は特に注意。下りで走るとは厳禁。	スタッフも緊急時以外は走らない。	野外全般・山道	B	○	○				
44	現地	参加者の行動 2	原則として、林道などの山側急斜面側、下が急勾配の谷側近くを歩かず中央を歩く。	落石、転落の危険をできるだけ回避。斜面にある植物の解説を行う場合は参加者の安全に配慮。	常に参加者の行動に注意を払う。	野外全般・山道	C	○	○				
45	現地	参加者の行動 3	急傾斜や足場の狭い場所で参加者同士で手を貸しあう行動に注意を払う。	手を貸さなければいけない状況では、極力、スタッフが自分の体制を十分に確保したうえで慎重に行う。	自力でのゆっくり、確実な行動を促し、あなたが来るまで待っているとのサインを送る。	野外全般・山道	C	○	○				
46	現地	参加者の危険な行動	参加者がコース外に出る、ふざけて石を投げたり、木にぶら下がったり、枝を振り回すなどの危険な行動を取った場合は速やかに制止する。	参加者の意識として、これくらいはという考えでの行動と経験知識がないため全く危険と思わない場合の2つが考えられるので、状況からふさわしい制止方法を考慮。	難しいが、日頃から参加者の性格を把握するように努める。	野外全般・山道	C	○	○				

47	現地	昼食	広くて安全な場所を選定。近くにトイレがあると良い。野外で用を足す時は周辺の人に声をかけるように要請する。昼食後の出発時の人員確認を怠らない。	広い場所が確保できず、班毎となる場合は各班の連絡を密にする。野外でのトイレでは急斜面等危険な場所、遠くへ行かないように要請する。		野外全般・山道	B					
48	現地	トイレ	建物のトイレが無く、野外となる場合は、近くの人に「用を足す」旨を必ず言ってから班を外れること、伝言を聞いた人はそれを班リーダーに伝えるように参加者に伝えておく。 昼食場所などでは、用を足す区域をあらかじめ参加者に伝えるようにする。	用を足しに班から外れたことに気が付かずに行方不明になったり、転落事故に遭う可能性はかなり高いので特に注意が必要。 安全に用が足せる場所を下見時に確認しておく。 トイレを我慢しての水分不足にも十分注意。		野外全般・山道	B					
53	個別危険事項	雨	早めに雨具を着用・使用して体を濡らさないようにする。傘による目や顔などへの接触事故に注意を促す。ゆっくりと余裕を持った行動をするようにする。そのため、必要に応じて行程を短縮する。	足下が濡れて滑り安くなり、雨具により動作がぎこちなくなり、視界も狭くなることなどから様々な事故が起き安くなるので、行動全体をゆっくり運ぶ。衣服が濡れることによる動作の制約も大きくなることに注意。	降雨の状況を見定め、引き返し、中止などを考慮する。	野外全般・山道	C			○		
54	個別危険事項	落石	崖の下や林道の切り土面下など落石の危険がある箇所は上に注意しながら速やかに通り過ぎる。	強風時で木が揺れている時などは特に発生しやすい。つづら折れの道などでは、下の道に落石を落とさないように注意。		野外全般・山道	C			○	○	
55	個別危険事項	倒木	枯れている木や腐っている木などが強風などで倒れる危険があることを常に意識する。	倒木が発生した時に、その倒木に倒れかかられて隣接する木が倒れる場合があることに留意。		野外全般・山道	C			○	○	○
56	個別危険事項	枝跳ね	後ろの人に声をかけて注意を促すとともに、跳ねないように押さえるなど協力して、枝跳ね事故を防止する。	前の人との通過により後ろの人に枝が跳ねるのを防ぐことを意識させ、協力して行動することの重要性を認識してもらう。	グループ行動での注意点を意識してもらい、リードする。	野外全般・山道	C	○	○			○
58	個別危険事項	疲労	休憩して水分補給と糖分の補給を行う。	参加者の疲労の予測は難しいが、適度な休憩・水分と糖分補給を心がける。また、服装による温度調節にも気を配り、適切な服装(服の脱ぎ着)をアドバイスする。	行動中の会話などで疲労傾向を把握し、休憩などの対応を早め実施。	野外全般・山道	B	○	○			
59	個別危険事項	滑落・転落・転倒	参加者の状況を把握して適切にアドバイス。ゆっくり行動することで防止に繋げる。	疲労時には起きやすいことを常に意識。狭い、急峻、崖地などでは適切なアドバイスとゆっくり行動を実施。	危険箇所を通過した気のゆるみからなんでもない箇所でも起こる場合もあることに留意。	野外全般・山道	B	○	○		○	
61	個別危険事項	ヤマビル	ヤマビル生息地域では、短靴ではなく、くるぶし以上の靴、靴下を二重に、ズボンの裾を上靴の靴下の中に入れ、皮膚にヤマビルが侵入しにくいスタイルを推奨する。靴などに食塩水、忌避剤等の使用も有効。吸血された場合はきれいな水で洗い絆創膏を貼る。	ヤマビルは湿っている地面、落ち葉の層などに居るので、足下からの侵入を防ぐ。明るい色の服装だと気づき安い。参加者相互の監視体制による早期発見と除去が有効。吸血時に血液凝固を防ぐ物質を出すので、吸血部の地を少し押し出すと良い。清澄山系から清和地域に拡大中。	コースの中で湿っていて落ち葉の積もっている場所での解説を避けるなど、ヤマビルのいるような場所で足を止めない。	野外全般・山道	C	○	○			○
62	個別危険事項	マムシ・ヤマカガシ等毒蛇	思いもかけない場所に居ることがあるので注意。発見したら、速やかに離れるとともに他の人に知らせる。万が一噛まれた場合は救急車を要請。噛まれた後には毒が全身に回らないように激しい運動はしない。	人間が心地良いと感じる場所に居たりすることがあることに留意。中には毒蛇を見たことがない人(特に子供や若人)も多くなっているので注意を喚起する。	ポイズンリムーバーを持参していれば毒を吸い出す。知らないため気にせず近づくと人がいることに留意。	野外全般・山道	C	○	○			○

63	個別危険事項	イノシシ	イノシシを発見した場合は他の人に知らせ、ゆっくりと後退する形で遠ざかるように行動。背中をイノシシに見せるような形での行動はイノシシを興奮させて襲ってくる場合があるので避ける。	突然の遭遇が最も危険。遭遇した場合は落ち着いて行動。ビックリしての転倒、転落などに注意。生息域は南房総地域から北総地域に広がっている。	2012. 1.8午前9時半頃に鴨川市の関東ふれあいの道でイノシシと遭遇したハイカーが襲われてけがをした事例あり。生息密度が高い南房総地域では鈴などを携行して相手に人間の存在を知らせることも考	野外全般・山道	C							○
64	個別危険事項	マダニ	春から秋の活動期にかけてはマダニに噛まれないように肌の露出を避ける服装(長袖、長ズボン)を心がける。	マダニが媒介するウイルス感染を防ぐため、マダニに噛まれないことを心がける。野外活動の後には風呂に入り体を点検。ダニが食いついている場合は無理に剥がさず医者に行くように説明。	明るい色の服装だとダニに気が付き安く推奨。ダニがしっかりと皮膚に食いつくまで1日程度かかる場合もあり、風呂は非常に有効。	野外全般・山道	C							○
65	個別危険事項	ツタウルシ・ハゼ等かぶれる植物やトゲのある植物	適切なアドバイスをを行いかぶれ事故やトゲによるけがに遭わないよう注意する。	適切なアドバイスによる注意喚起が重要。危険な植物に気を取られての転落・転倒等にも留意。	下見時に除去できれば除去しておく。	野外全般・山道	C							○
66	個別危険事項	木橋・吊り橋	年数の経っている木橋・吊り橋は一人ずつ渡ることを原則とする。橋の上で立ち止まらずに連続して渡る場合は前の人が2/3以上進んだら次の人が渡り始める。橋の揺れが大きくなった場合は収まるまで少し待つ。	年数が経っている木橋等は壊れる危険があるので一人ずつ渡ることを原則とするが、橋の長さの2/3の間隔を置けば、一人が橋の中央に居る時の荷重を超えないので次の人が渡り始めて良い。揺れは共振現象により崩落の危険性が高まるので収まるまで待つ。	安全そうに見える木橋や吊り橋でもふざけて皆で揺らすことは最も危険。かつて丹沢で子供達が揺らして崩落した事故あり。	野外全般・山道	C							○
67	個別危険事項	トンネル	トンネル内は暗く、水溜まりができていたり、ぬかっついて滑りやすい場所が合ったりするので、リーダーが適切に誘導しゆっくり行動する。ランプがあると便利なことも多い。	トンネル内はいきなり暗くなるので目が慣れるまでゆっくり行動する。素掘りのトンネルでは天井、側壁からの落石、落盤の危険も考慮して安全と思われるコース取りに努める。	トンネルの安全度の判断は難しく、雨宿りなどに使う場合も危険があることに留意する。	野外全般・山道	C							○
68	個別危険事項	安全柵・ロープ等	谷側の安全柵や支柱、ロープ・鎖などに寄りかかったり、掴んで体重をかけたりしない。但し、よろけたりと緊急の場合は利用することはやむを得ないが、緊急時のみ、かつバランス維持程度で利用。体重をかけない。	設置されている安全柵やロープは老朽化したり根元が安定していない場合が多いので体重をかけるような使い方はしない。あくまで視線誘導のためとして取り扱う。	一見、安全なように見えても、谷側の構造物は視線誘導のためと考える。	野外全般・山道	C	○		○				

FIC野外活動・行事安全マニュアル【特に子供注意事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
18	参加者・募集・受付	服装(帽子)	落枝等上部からの落下物、横枝等にぶつかった場合に頭部保護に重要な役割を果たすことを説明し、極力かぶるように案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	忘れた場合は、タオル等の活用など、何らかの方法で頭部を保護することを勧める。	落石等の危険のある場所ではヘルメットも考慮。	野外全般・山道	B	○	○			
41	現地	すれ違い、追い越され、追い抜き	コースが片斜面になっている場所で対抗者とする場合、及び後ろから来た早い人に追い越してもらう場合は山側で待機する。逆に対抗者が待ってくれている場合及び同じ方向の人を追い越す場合は待っていてくれる人との接触を避け慎重に谷側を通過する。班に分かれての行動であっても、FIC全グループとして山側待機、谷側通過の原則を徹底する。	待機する方が不安定な状態になるので、すれ違う人、追い越す人との接触でバランスを崩しても谷に転落しにくい山側で待機することを原則とする。逆に、こちらが待機している人の脇を通過する時は谷側を通過することを原則とする。但し、相手が谷側で待機している場合は、相手に先に通過してもらおうよう依頼するか、こちらが先に通過する場合は相手と接触しないように特に注意を払う。すれ違う場合には、登り優先、人数の少ない方優先の原則に留意。	班長が班員に待機場所の声をかける時に「山側の右あるいは左」のように「山側」という言葉必ず入れるようにすることが参加者に待機場所の原則が理解されて良い。	野外全般・山道	B	○	○			
42	現地	休憩	野外行動では原則として1時間に1回程度の間隔で休憩を取る。休憩時間は、水分補給、糖分補給、服装の調節(上着、防寒着等の着脱)を行える時間とする。概ね5分～10分程度。休憩により各班の間隔が離れてしまわないように留意。下見時に共通の休憩場所を決めておくことも効果的。	広めの場所での説明・解説時を休憩と兼用することも効果的で参加者に「水、糖分、衣服調節」などの呼びかけをした上で解説に入る。この方法だと休憩回数が多くなり、自分の状況に応じて必要な処置を執れる。コース途中に全部の班を集めての解説ポイントを設定すると、休憩との兼用で利点が多い。	班リーダーが給等を班員に配って糖分補給を促すことも効果的。ただし、子供の場合は食物アレルギーのリスクがあるので原則として食べ物は配らない。	野外全般・山道	A	○	○			
43	現地	参加者の行動	野外では「走らない」「あわてない」「振り回さない」を厳守。	子供は特に注意。下りで走ること厳禁。	スタッフも緊急時以外は走らない。	野外全般・山道	B	○	○			
44	現地	参加者の行動 2	原則として、林道などの山側急斜面側、下が急勾配の谷側近くを歩かず中央を歩く。	落石、転落の危険をできるだけ回避。斜面にある植物の解説を行う場合は参加者の安全に配慮。	常に参加者の行動に注意を払う。	野外全般・山道	C	○	○			
45	現地	参加者の行動 3	急傾斜や足場の狭い場所で参加者同士で手を貸しあう行動に注意を払う。	手を貸さなければいけない状況では、極力、スタッフが自分の体制を十分に確保したうえで慎重に行う。	自力でのゆっくり、確実な行動を促し、あなたが来るまで待っているとのサインを送る。	野外全般・山道	C	○	○			
46	現地	参加者の危険な行動	参加者がコース外に出る、ふざけて石を投げたり、木にぶら下がったり、枝を振り回すなどの危険な行動を取った場合は速やかに制止する。	参加者の意識として、これくらいという考えでの行動と経験知識がないため全く危険と思わない場合の2つが考えられるので、状況からふさわしい制止方法を考慮。	難しいが、日頃から参加者の性格を把握するように努める。	野外全般・山道	C	○	○			
56	個別危険事項	枝跳ね	後ろの人に声をかけて注意を促すとともに、跳ねないように押さえるなど協力して、枝跳ね事故を防止する。	前の人の通過により後ろの人に枝が跳ねるのを防ぐことを意識させ、協力して行動することの重要性を認識してもらう。	グループ行動での注意点を意識してもらえようリードする。	野外全般・山道	C	○	○			○
58	個別危険事項	疲労	休憩して水分補給と糖分の補給を行う。	参加者の疲労の予測は難しいが、適度な休憩・水分と糖分補給を心がける。また、服装による温度調節にも気を配り、適切な服装(服の脱ぎ着)をアドバイスする。	行動中の会話などで疲労傾向を把握し、休憩などの対応を早めに実施。	野外全般・山道	B	○	○			
59	個別危険事項	滑落・転落・転倒	参加者の状況を把握して適切にアドバイス。ゆっくり行動することで防止に繋げる。	疲労時には起きやすいことを常に意識。狭い、急峻、崖などでは適切なアドバイスとゆっくり行動を実施。	危険箇所を通過した気のゆるみからなんでもない箇所でも起こる場合もあることに留意。	野外全般・山道	B	○	○		○	

60	個別危険事項	スズメバチ・アシナガバチ	①遭遇した場合は手で払ったり、走ったりなどの急激な行動は厳禁。ゆっくり後退して離れる。 ②初夏から晩秋までのスズメバチの活動時期には、原則として黒っぽい衣服(帽子を含む、)を避ける。また、香水、匂いの強い化粧品、クリーム等を使用しない。 スズメバチ・アシナガバチについては事故例も多く、被害も甚大なので更に詳しい情報を設ける。	千葉県ではおおむね5月～12月上旬頃迄が活動期。急激な行動、黒い色や強い匂いに刺激を受けて攻撃してくることに留意。万が一刺された場合はポイズンリムーバー等で吸引。ショック症状が起きる場合は救急車を要請。	下見時に巣を見つけた場合はできるだけ回避ルートを取るようになる。可能ならば駆除しておく。	野外全般	A	○	○				○
61	個別危険事項	ヤマビル	ヤマビル生息地域では、短靴ではなく、くるぶし以上の靴、靴下を二重に、ズボンの裾を上靴下の中に入れ、皮膚にヤマビルが侵入しにくいスタイルを推奨する。靴などに食塩水、忌避剤等の使用も有効。吸血された場合はきれいな水で洗い絆創膏を貼る。	ヤマビルは湿っている地面、落ち葉の層などに居るので、足下からの侵入を防ぐ。明るい色の服装だと気づき安い。参加者相互の監視体制による早期発見と除去が有効。吸血時に血液凝固を防ぐ物質を出すので、吸血部の地を少し押し出すと良い。清澄山系から清和地域に拡大中。	コースの中で湿っていて落ち葉の積もっている場所での解説を避けるなど、ヤマビルのいそうな場所で足を止めない。	野外全般・山道	C	○	○				○
62	個別危険事項	マムシ・ヤマカガシ等毒蛇	思いもかけない場所に居ることがあるので注意。発見したら、速やかに離れるとともに他の人に知らせる。万が一噛まれた場合は救急車を要請。噛まれた後には毒が全身に回らないように激しい運動はしない。	人間が心地良いと感じる場所に居たりすることがあることに留意。中には毒蛇を見たことがない人(特に子供や若人)も多くなっているので注意を喚起する。	ポイズンリムーバーを持参していれば毒を吸い出す。知らないため気にせず近づくと人がいることに留意。	野外全般・山道	C	○	○				○
68	個別危険事項	安全柵・ロープ等	谷側の安全柵や支柱、ロープ・鎖などに寄りかかったり、掴んで体重をかけたりしない。但し、よろけたりと緊急の場合は利用することはやむを得ないが、緊急時のみ、かつバランス維持程度で利用。体重をかけない。	設置されている安全柵やロープは老朽化したり根元が安定していない場合が多いので体重をかけると危険な使い方ではない。あくまで視線誘導のためとして取り扱う。	一見、安全のように見えても、谷側の構造物は視線誘導のためと考える。	野外全般・山道	C	○	○				

FIC野外活動・行事安全マニュアル【一般参加者関係事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
4	全体	ヒューマンエラー	事故の大部分はヒューマンエラー（人為ミス）から起こることを自覚する。	活動・行事の内容を安全対策の面から常に点検する。参加者全員が自分と全体の安全を確保するよう行動するように注意を促す。	参加者全員に自己責任の自覚を促す。	全て	A		○			
5	全体	ヒューマンエラー2	思い込みによる錯覚、勘違いは何人といえども起こりうる。どんなに経験知識が豊富なベテランでも錯覚、勘違いから逃れられないことを理解する。	錯覚、勘違いに本人は全く気がついていないので、疑問を感じたり、より良い対策・方策を思いついたスタッフはそれをリーダーに遠慮無く伝える。FICではスタッフが気軽に助言しあえる雰囲気構築を常に心掛ける。	スタッフや参加者から助言を受けたリーダーは、その助言を採用しない場合は、できるだけその理由を説明するように心掛ける。この態度が自らの思い込みによる危険を避けることにつながる。	全て	A		○			
15	参加者・募集・受付	募集案内	参加者がコースの難易度を理解し、自分の体力と経験を勘案して応募できるよう工夫をする。	他のコースと比較できる標準的な表現とそのコース自体の特徴を示す表現の両方が記載されると分かりやすい。	全ての企画においてコースの難易度を簡潔に情報提供するように努める。	野外全般	B		○			
16	参加者・募集・受付	受付案内	参加者が適切に準備できるよう必要な内容を簡潔に知らせる。	情報量が多すぎると返って注意を引かないことを十分に考慮。	詳細情報をHP等で知らせる。	野外全般	B		○			
17	参加者・募集・受付	服装(全体)	実施する場所・季節・コースに応じた適切な服装(長袖・長ズボン)を案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	体の露出部分が少なくなるような服装を推奨。ヤマビル、マダニ対策など明るい色の服装が望ましい。		野外全般	B		○			
18	参加者・募集・受付	服装(帽子)	落枝等上部からの落下物、横枝等によつた場合に頭部保護に重要な役割を果たすことを説明し、極力かぶるように案内。スズメバチの活動期では黒い色を避ける。	忘れた場合は、タオル等の活用など、何らかの方法で頭部を保護することを勧める。	落石等の危険のある場所ではヘルメットも考慮。	野外全般・山道	B	○	○			
19	参加者・募集・受付	服装(上着)	脱ぎ着し易い上着を推奨する。	体温調節し易い上着を推奨。		野外全般	B		○			
20	参加者・募集・受付	服装(手袋)	極力使うことを推奨。冬期等気温の低い季節には暖かいものを。バランスの維持、転倒時の危険回避等、手をポケットに入れない行動を呼びかける。	鋭い岩角、トゲある樹木等を掴む場合があることを考慮して掌側は摩擦が大きいくトゲなどを通さない素材でできているものを推奨。		野外全般・山道	B		○			
21	参加者・募集・受付	服装(ズボン)	長ズボンで歩きやすく、繊維が密なものを推奨。	トゲ、岩角に擦れても表面が密だとひっかかり傷ができにくく皮膚を保護する効果が大。		野外全般・山道	B		○			
22	参加者・募集・受付	服装(靴下)	ヤマビル生息地域ではくるぶし以上のものので重ね履きを推奨。	ヤマビル対策として外側の靴下でズボンの裾を覆う履き方が有効。		野外全般・山道	B		○			
23	参加者・募集・受付	服装(靴)	軽登山靴を推奨。ヤマビル生息地域では足首まである深めの靴を推奨。	歩行場所が舗装道路、林道、公園など広く平坦な場所のみの場合は運動靴も可。		野外全般・山道	B		○			
24	参加者・募集・受付	持ち物(雨具)	必携を原則とする。野外全般・山道コースの場合はセパレートタイプを推奨。	受付案内には持参するように記載しておく。		野外全般・山道	B		○			
25	参加者・募集・受付	持ち物(リュック)	極力両手が使える状態を推奨。	全くの野外未経験者の場合、肩掛けバック等で参加する場合もあるので注意。		野外全般・山道	B		○			
26	参加者・募集・受付	持ち物(杖、ストック)	野外全般・山道ではあると便利。	慣れないと返って危険な場合もあることを考慮。		野外全般・山道	C		○			
27	参加者・募集・受付	持ち物(敷物)	昼食場所が山の中の場合は持参を推奨。	ヒル・マダニ対策としても重要、数人での使用も可。	持参しなかった参加者がいた場合は持参した参加者に協力を要請。	野外全般・山道	C		○			
28	現地まで	集合場所	集合場所は分かりやすく、バス等使用車両に安全に乗り降りできる場所を選ぶ。現地集合の場合は、分かりやすく広く、交通事故に遭いにくい場所を選ぶ。	自動車道を横断しない、段差が無い広い場所を選ぶ。友人との再会などで注意が散漫になりがちなことに注意する。	見通しが良い場所だと、参加者が集まる様子も確認できる。	野外全般	B		○			

29	現地まで	健康確認	目的地までのバスの中で参加者に自身の健康確認を呼びかけ、不調の場合は申告してもらい、場合によってはバスで待機してもらう。	コースの概要、難易度の説明と併せて行い、参加者が自らの体調と比較出来るように配慮。	不調を申告した参加者に対して別メニューの用意があると良い。	野外全般・山道	A		○				
30	現地まで	持ち物確認	当日必要な装備(帽子、手袋、靴等)、持ち物(昼食、飲み物、雨具、敷物等)の確認を呼びかける。	忘れた参加者がいる場合は、他の参加者から借りる等適宜対応。	若干の予備があると便利。	野外全般・山道	C		○				
33	現地	準備運動	身体だけでなく心の準備にもなるので適切に実施。	バス等での現地までの移動で体が硬くなっていることも考慮する。		野外全般	B		○				
34	現地	班分け	FICの一般参加者対象活動・行事では、安全管理は班毎に行うことを原則とする。	班の人数はFICの野外講座では10人程度を目安にする。人数があまり多くなると掌握が難しくなることに留意。	参加者の経験・体力等を蓄積して安全確保に活用できるように記録整備する。	野外全般	C		○				
36	現地	班行動(参加者の協力)	班の中に信頼できる参加者がいる場合は、できる範囲で協力してもらう。班の最後尾で班員の確認など。	一般参加者は客ではあるが、役割を快く引き受けていただける場合も多い。	信頼できる参加者情報の蓄積。	野外全般・山道	C		○				
39	現地	危険箇所	危険な箇所の状況に応じて適切な行動を取る。足下が危険な場合(急傾斜、滑り安い・踏きやすい、滑落の恐れなど)はゆっくり通過。頭上が危険な場合(落石、落枝、土石流など)は速やかに通過することを原則とする。	足下の危険と頭上の危険が重なった場所では足下の危険回避を優先し、滑落・転倒などの防止のためにゆっくり進むことを原則とする。参加者の状況から頭上の危険度が高くなる場合は引き返すことも考慮。	参加者の経験・体力、その日の体調をできる限り掌握しておく。	野外全般・山道	B		○			○	
40	現地	注意点の声かけ	現地の状況に応じた注意事項を声かけする。(横枝、濡れた岩、落ち葉の集積、地表に出ている根、掴みやすい所にある枯れ木、枝はね)など	班リーダーや経験者には当然の事項でも参加者には気が付かない点があることを考慮。うるさすぎないことに配慮。	参加者の状況に応じた声かけができるように参加者のデータを蓄積。	野外全般・山道	C		○				
41	現地	すれ違い、追い越され、追い抜き	コースが片斜面になっている場所では対抗者とすれ違う場合、及び後ろから来た早い人に追い越してもらう場合は山側で待機する。逆に対抗者が待ってくれている場合及び同じ方向の人を追い越す場合は待っていてくれる人との接触を避け慎重に谷側を通過する。班に分かれての行動であっても、FIC全グループとして山側待機、谷側通過の原則を徹底する。	待機する方が不安定な状態になるので、すれ違う人、追い越す人との接触でバランスを崩しても谷に転落しにくい山側で待機することを原則とする。逆に、こちらが待機している人の脇を通過する時は谷側を通過することを原則とする。但し、相手が谷側で待機している場合は、相手に先に通過してもらうよう依頼するか、こちらが先に通過する場合は相手と接触しないように特に注意を払う。すれ違う場合には、登り優先、人数の少ない方優先の原則に留意。	班長が班員に待機場所の声をかける時に「山側の右あるいは左」のように「山側」という言葉を必ず入れるようにすることが参加者に待機場所の原則が理解されて良い。	野外全般・山道	B		○	○			
42	現地	休憩	野外行動では原則として1時間に1回程度の間隔で休憩を取る。休憩時間は、水分補給、糖分補給、服装の調節(上着、防寒着等の着脱)を行える時間とする。概ね5分～10分程度。休憩により各班の間隔が離れてしまわないように留意。下見時に共通の休憩場所を決めておくことも効果的。	広めの場所での説明・解説時を休憩と兼用することも効果的で参加者に「水、糖分、衣服調節」などの呼びかけをした上で解説に入る。この方法だと休憩回数が多くなり、自分の状況に応じて必要な処置を執れる。コース途中で全部の班を集めての解説ポイントを設定すると、休憩との兼用で利点が多い。	班リーダーが飴等を班員に配って糖分補給を促すことも効果的。ただし、子供の場合は食物アレルギーのリスクがあるので原則として食べ物は配らない。	野外全般・山道	A		○	○			
43	現地	参加者の行動	野外では「走らない」「あわてない」「振り回さない」を厳守。	子供は特に注意。下りで走ること厳禁。	スタッフも緊急時以外は走らない。	野外全般・山道	B		○	○			
44	現地	参加者の行動 2	原則として、林道などの山側急斜面側、下が急勾配の谷側近くを歩かず中央を歩く。	落石、転落の危険をできるだけ回避。斜面にある植物の解説を行う場合は参加者の安全に配慮。	常に参加者の行動に注意を払う。	野外全般・山道	C		○	○			
45	現地	参加者の行動 3	急傾斜や足場の狭い場所で参加者同士で手を貸しあう行動に注意を払う。	手を貸さなければいけない状況では、極力、スタッフが自分の体制を十分に確保したうえで慎重に行う。	自力でのゆっくり、確実な行動を促し、あなたが来るまで待っているとのサインを送る。	野外全般・山道	C		○	○			
46	現地	参加者の危険な行動	参加者がコース外に出る、ふざけて石を投げたり、木にぶら下がったり、枝を振り回すなどの危険な行動を取った場合は速やかに制止する。	参加者の意識として、これくらいという考えでの行動と経験知識がないため全く危険と思わない場合の2つが考えられるので、状況からふさわしい制止方法を考慮。	難しいが、日頃から参加者の性格を把握するように努める。	野外全般・山道	C		○	○			

49	現地	降車場所	足下がしっかりしていて、ゆっくり降車でき、すぐに自動車道の来ない場所に移動できる場所を選定。途中のトイレ休憩時も同様。	長時間乗車で体が硬くなり、降車時によろけがちで、バスの乗降時は事故の確率が高く慎重な対応を心がける。	スタッフが降車口の下で待機して、よろけた場合に介助できる体制を取ると良い。	野外全般	B		○				
56	個別危険事項	枝跳ね	後ろの人に声をかけて注意を促すとともに、跳ねないように押さえるなど協力して、枝跳ね事故を防止する。	前の人の通過により後ろの人に枝が跳ねるのを防ぐことを意識させ、協力して行動することの重要性を認識してもらう。	グループ行動での注意点を意識してもらえるようにリードする。	野外全般・山道	C	○	○				○
58	個別危険事項	疲労	休憩して水分補給と糖分の補給を行う。	参加者の疲労の予測は難しいが、適度な休憩・水分と糖分補給を心がける。また、服装による温度調節にも気を配り、適切な服装(服の脱ぎ着)をアドバイスする。	行動中の会話などで疲労傾向を把握し、休憩などの対応を早めの実施。	野外全般・山道	B	○	○				
59	個別危険事項	滑落・転落・転倒	参加者の状況を把握して適切にアドバイス。ゆっくり行動することで防止に繋げる。	疲労時には起きやすいことを常に意識。狭い、急峻、崖地などでは適切なアドバイスとゆっくり行動を実施。	危険箇所を通過した気のゆるみからなんでもない箇所でも起こる場合もあることに留意。	野外全般・山道	B	○	○		○		
60	個別危険事項	スズメバチ・アシナガバチ	①遭遇した場合は手で払ったり、走ったりなどの急激な行動は厳禁。ゆっくり後退して離れる。 ②初夏から晩秋までのスズメバチの活動時期には、原則として黒っぽい衣服(帽子を含む、)を避ける。また、香水、匂いの強い化粧品、クリーム等を使用しない。 スズメバチ・アシナガバチについては事故例も多く、被害も甚大なので更に詳しい情報を設ける。	千葉県ではおおむね5月～12月上旬頃迄が活動期。急激な行動、黒い色や強い匂いに刺激を受けて攻撃してくることに留意。万が一刺された場合はボイズンリムーバー等で吸引。ショック症状が起きる場合は救急車を要請。	下見時に巣を見つけた場合はできるだけ回避ルートを取るようにする。可能ならば駆除しておく。	野外全般	A	○	○				○
61	個別危険事項	ヤマビル	ヤマビル生息地域では、短靴ではなく、くるぶし以上の靴、靴下を二重に、ズボンの裾を上靴の靴下の中に入れ、皮膚にヤマビルが侵入しにくいスタイルを推奨する。靴などに食塩水、忌避剤等の使用も有効。吸血された場合はきれいな水で洗い絆創膏を貼る。	ヤマビルは湿っている地面、落ち葉の層などに居るので、足下からの侵入を防ぐ。明るい色の服装だと気づき安い。参加者相互の監視体制による早期発見と除去が有効。吸血時に血液凝固を防ぐ物質を出すので、吸血部の地を少し押し出すと良い。清澄山系から清和地域に拡大中。	コースの中で湿っていて落ち葉の積もっている場所での解説を避けるなど、ヤマビルのいそうな場所で足を止めない。	野外全般・山道	C	○	○				○
62	個別危険事項	マムシ・ヤマカガシ等毒蛇	思いもかけない場所に居ることがあるので注意。発見したら、速やかに離れるとともに他の人に知らせる。万が一噛まれた場合は救急車を要請。噛まれた後には毒が全身に回らないように激しい運動はしない。	人間が心地良いと感じる場所に居たりすることがあることに留意。中には毒蛇を見たことがない人(特に子供や若人)も多くなっているので注意を喚起する。	ボイズンリムーバーを持参していれば毒を吸い出す。知らないため気にせず近づくと人がいることに留意。	野外全般・山道	C	○	○				○
68	個別危険事項	安全柵・ロープ等	谷側の安全柵や支柱、ロープ・鎖などに寄りかかったり、掴んで体重をかけたりしない。但し、よろけたりと緊急の場合は利用することはやむを得ないが、緊急時のみ、かつバランス維持程度で利用。体重をかけない。	設置されている安全柵やロープは老朽化したり根元が安定していない場合が多いので体重をかけると壊れるような使い方はしない。あくまで視線誘導のためとして取り扱う。	一見、安全なように見えても、谷側の構造物は視線誘導のためと考える。	野外全般・山道	C	○	○				

FIC野外活動・行事安全マニュアル【気象関係事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
11	計画と下見	危険箇所 の確認と 対応策の 決定	急な斜面や階段、滑りやすい岩場、踏みやすい木の根等危険箇所を確認し、対応方法を決定する。	危険箇所は雨、風等の天候、参加者の体力・知識・経験等によって変化することを考慮する。	悪天時の下見も有効。	野外全般・山道	B			○	○	
51	個別危険事項	雷	雷に遭遇した時は、森林の中に逃げ込み、背の高い木から離れる。野原では姿勢を低く保ち、自分が突起物にならないようにする。東屋等に避難する場合は壁や柱から離れた位置を取る。	落雷は突起物に落ちる場合が大半。突起物(背の高い木、飛び出した岩など)から離れる、また、野原や田畑では立っている自分が突起物になってしまうので、森の中に避難する。近くに樹林が無い場合は低い姿勢(座る、しゃがむ)を保つ。東屋などに避難する場合は壁や柱から少し離れる。東屋に落雷した電流が壁や柱を伝わって地面に流れるため感電しないように。	雷は突然発生する場合もあるので予測が難しいが、当日の気象情報に注意し、雷との遭遇を避けるように留意する。	野外全般	C			○		
52	個別危険事項	強風	強風時は落下物が増えるので上方に注意を払うとともに、バランスを崩して転倒、踏み外しに注意する。	強風で木が揺すられると根本からの落石、枝の落下・飛来、倒木などが起き安いので崖下、大きな木の下や近くを避ける。	強風の場合は中止も考慮する。	野外全般	C			○		
53	個別危険事項	雨	早めに雨具を着用・使用して体を濡らさないようにする。傘による目や顔などへの接触事故に注意を促す。ゆつくりと余裕を持った行動をするようにする。そのため、必要に応じて行程を短縮する。	足下が濡れて滑り安くなり、雨具により動作がぎこちなくなり、視界も狭くなることなどから様々な事故が起き安くなるので、行動全体をゆつくり運ぶ。衣服が濡れることによる動作の制約も大きくなることに注意。	降雨の状況を見定め、引き返し、中止などを考慮する。	野外全般・山道	C			○		
54	個別危険事項	落石	崖の下や林道の切り土面下など落石の危険がある箇所は上に注意しながら速やかに通過する。	強風時で木が揺れている時などは特に発生しやすい。つづら折れの道などでは、下の道に落石を落とさないように注意。		野外全般・山道	C			○	○	
55	個別危険事項	倒木	枯れている木や腐っている木などが強風などで倒れる危険があることを常に意識する。	倒木が発生した時に、その倒木に倒れかかられて隣接する木が倒れる場合があることに留意。		野外全般・山道	C			○	○	○
57	個別危険事項	枝の落下	枝の落下に注意を払い、強風時には枝の落下が予想される位置での解説、休憩、昼食など長時間とどまる行動を避ける。	強風時に起きやすいが、風が無くても突然落下してくる場合もあることに留意。	林内作業活動においてはヘルメットの着用に心がける。	野外全般	C			○		○

FIC野外活動・行事安全マニュアル【地形関係事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
7	計画と下見	計画(企画)立案	計画(企画)立案に当たっては、最新の状況を確認した上での立案に努める。	立案者にとって慣れ親しんだ場所・コースであっても時間の経過により思いがけない変化が生じている場合があることに留意。	ネットや現地に詳しい人からの情報の活用も有効。	野外全般	B				○	○
11	計画と下見	危険箇所の確認と対応策の決定	急な斜面や階段、滑りやすい岩場、躓きやすい木の根等危険箇所を確認し、対応方法を決定する。	危険箇所は雨、風等の天候、参加者の体力・知識・経験等によって変化することを考慮する。	悪天時の下見も有効。	野外全般・山道	B			○	○	
12	計画と下見	道迷い防止	迷いそうな場所を現地及び地図上で確認し、必要に応じて下見時に目印を着ける。かつ、状況をスタッフが共有する。	目印には倒木、木の枝等自然物を利用すると除去を省略できることが多い。	カラーテープ、ひもなどを使った場合残すか除去かを適切に判断。	野外全般・山道	B				○	
13	計画と下見	携帯電話	下見においてできる限り携帯電話の通話の可否を場所毎に確認。	通信会社により違うので、実際に使用する携帯電話での確認が必要。	通話の場所毎の可否を位置図に示せると良い。	野外全般・山道	B				○	
31	現地まで	行程説明	当日の行程の概要を説明。	あらかじめ行程を知ってもらうことで各自、自分の準備ができる。		野外全般・山道	C				○	
32	現地まで	注意点の説明	当日の活動・行事における注意点を説明。トイレの箇所は重要なので必ず説明。	FICメンバーには自明のことでも参加者にとっては気が付いていないことも多いことに留意。	多すぎると印象に残らないので重点項目を選定。	野外全般・山道	C				○	○
37	現地	説明ポイント	説明、解説は安全な場所で行う。注意場所(落石、落枝、滑落、転倒、有毒動植物等)	前の班の移動を待つための待機場所の安全にも留意する。参加者の崖下への覗き込み行動に注意。		野外全般・山道	C				○	○
38	現地	説明ポイント2	解説の場所では上部からの落下物の危険が無いかに注意し、参加者の位置などに配慮する。	2012年11月に大垣市で説明を聞いている最中に杉の枝が落ちてきて小学1年生の女子が死亡する事故が発生している。	大垣市の事故ではヘルメットを着用していなかったことからヘルメットの着用の有無が問題になっている。当日は強風。	野外全般	A				○	○
39	現地	危険箇所	危険な箇所の状況に応じて適切な行動を取る。足下が危険な場合(急傾斜、滑り安い・躓きやすい、滑落の恐れなど)はゆっくり通過。頭上が危険な場合(落石、落枝、土石流など)は速やかに通過することを原則とする。	足下の危険と頭上の危険が重なった場所では足下の危険回避を優先し、滑落・転倒などの防止のためにゆっくり進むことを原則とする。参加者の状況から頭上の危険度が高くなる場合は引き返すことも考慮。	参加者の経験・体力、その日の体調をできる限り掌握しておく。	野外全般・山道	B		○		○	
54	個別危険事項	落石	崖の下や林道の切り土面下など落石の危険がある箇所は上に注意しながら速やかに通り過ぎる。	強風時で木が揺れている時などは特に発生しやすい。つづら折れの道などでは、下の道に落石を落とさないように注意。		野外全般・山道	C			○	○	
55	個別危険事項	倒木	枯れている木や腐っている木などが強風などで倒れる危険があることを常に意識する。	倒木が発生した時に、その倒木に倒れかかられて隣接する木が倒れる場合があることに留意。		野外全般・山道	C			○	○	○
59	個別危険事項	滑落・転落・転倒	参加者の状況を把握して適切にアドバイス。ゆっくり行動することで防止に繋げる。	疲労時には起きやすいことを常に意識。狭い、急峻、崖地などでは適切なアドバイスとゆっくり行動を実施。	危険箇所を通過した気のゆるみからなんでもない箇所でも起こる場合もあることに留意。	野外全般・山道	B	○	○		○	
66	個別危険事項	木橋・吊り橋	年数の経っている木橋・吊り橋は一人ずつ渡ることを原則とする。橋の上で立ち止まらずに連続して渡る場合は前の人が2/3以上進んだら次の人が渡り始める。橋の揺れが大きくなった場合は収まるまで少し待つ。	年数が経っている木橋等は壊れる危険があるので一人ずつ渡ることを原則とするが、橋の長さの2/3の間隔を置けば、一人が橋の中央に居る時の荷重を超えないので次の人が渡り始めて良い。揺れは共振現象により崩落の危険性が高まるので収まるまで待つ。	安全そうに見える木橋や吊り橋でもふざけて皆で揺らすことは最も危険。かつて丹沢で子供達が揺らして崩落した事故あり。	野外全般・山道	C				○	
67	個別危険事項	トンネル	トンネル内は暗く、水溜まりができていたり、ぬかっかけていて滑りやすい場所が合ったりするので、リーダーが適切に誘導しゆっくり行動する。ランプがあると便利なことも多い。	トンネル内はいきなり暗くなるので目が慣れるまでゆっくり行動する。素堀りのトンネルでは天井、側壁からの落石、落盤の危険も考慮して安全と思われるコース取りに努める。	トンネルの安全度の判断は難しく、雨宿りなどに使う場合も危険があることに留意する。	野外全般・山道	C				○	

FIC野外活動・行事安全マニュアル【動植物関係事項】

NO	段階	項目	対応・対処	説明及び追加情報	できれば推奨	場面	重要度	子供	参加者	気象	地形	動植物
7	計画と下見	計画(企画)立案	計画(企画)立案に当たっては、最新の状況を確認した上での立案に努める。	立案者にとって慣れ親しんだ場所・コースであっても時間の経過により思いがけない変化が生じている場合があることに留意。	ネットや現地に詳しい人からの情報の活用も有効。	野外全般	B				○	○
32	現地まで	注意点の説明	当日の活動・行事における注意点を説明。トイレの箇所は重要なので必ず説明。	FICメンバーには自明のことでも参加者にとっては気が付いていないことも多いことに留意。	多すぎると印象に残らないので重点項目を選定。	野外全般・山道	C				○	○
37	現地	説明ポイント	説明、解説は安全な場所で行う。注意場所(落石、落枝、滑落、転倒、有毒動植物等)	前の班の移動を待つための待機場所の安全にも留意する。参加者の崖下への覗き込み行動に注意。		野外全般・山道	C				○	○
38	現地	説明ポイント2	解説の場所では上部からの落下物の危険が無いかに注意し、参加者の位置などに配慮する。	2012年11月に大垣市で説明を聞いている最中に杉の枝が落ちてきて小学1年生の女子が死亡する事故が発生している。	大垣市の事故ではヘルメットを着用していなかったことからヘルメットの着用の有無が問題になっている。当日は強風。	野外全般	A				○	○
55	個別危険事項	倒木	枯れている木や腐っている木などが強風などで倒れる危険があることを常に意識する。	倒木が発生した時に、その倒木に倒れかかられて隣接する木が倒れる場合があることに留意。		野外全般・山道	C			○	○	○
56	個別危険事項	枝跳ね	後ろの人に声をかけて注意を促すとともに、跳ねないように押さえるなど協力して、枝跳ね事故を防止する。	前の人の通過により後ろの人に枝が跳ねるのを防ぐことを意識させ、協力して行動することの重要性を認識してもらう。	グループ行動での注意点を意識してもらるようにリードする。	野外全般・山道	C	○	○			○
57	個別危険事項	枝の落下	枝の落下に注意を払い、強風時には枝の落下が予想される位置での解説、休憩、昼食など長時間とどまる行動を避ける。	強風時に起きやすいが、風が無くても突然落下してくる場合もあることに留意。	林内作業活動においてはヘルメットの着用に心がける。	野外全般	C			○		○
60	個別危険事項	スズメバチ・アシナガバチ	①遭遇した場合は手で払ったり、走ったりなどの急激な行動は厳禁。ゆっくり後退して離れる。 ②初夏から晩秋までのスズメバチの活動時期には、原則として黒っぽい衣服(帽子を含む、)を避ける。また、香水、匂いの強い化粧品、クリーム等を使用しない。 スズメバチ・アシナガバチについては事故例も多く、被害も甚大なので更に詳しい情報を設ける。	千葉県ではおおむね5月～12月上旬頃迄が活動期。急激な行動、黒い色や強い匂いに刺激を受けて攻撃してくることに留意。万が一刺された場合はボイズンリムーバー等で吸引。ショック症状が起きる場合は救急車を要請。	下見時に巣を見つけた場合はできるだけ回避ルートを取るようにする。可能ならば駆除しておく。	野外全般	A	○	○			○
61	個別危険事項	ヤマビル	ヤマビル生息地域では、短靴ではなく、くるぶし以上の靴、靴下を二重に、ズボンの裾を上靴の靴下の中に入れ、皮膚にヤマビルが侵入しにくいスタイルを推奨する。靴などに食塩水、忌避剤等の使用も有効。吸血された場合はきれいな水で洗い絆創膏を貼る。	ヤマビルは湿っている地面、落ち葉の層などに居るので、足下からの侵入を防ぐ。明るい色の服装だと気づきやすい。参加者相互の監視体制による早期発見と除去が有効。吸血時に血液凝固を防ぐ物質を出すので、吸血部の地を少し押し出すと良い。清澄山系から清和地域に拡大中。	コースの中で湿っていて落ち葉の積もっている場所での解説を避けるなど、ヤマビルのいるような場所で足を止めない。	野外全般・山道	C	○	○			○
62	個別危険事項	マムシ・ヤマカガシ等毒蛇	思いもかけない場所に居ることがあるので注意。発見したら、速やかに離れるとともに他の人に知らせる。万が一噛まれた場合は救急車を要請。噛まれた後には毒が全身に回らないように激しい運動はしない。	人間が心地良いと感じる場所に居たりすることがあることに留意。中には毒蛇を見たことがない人(特に子供や若人)も多くなっているので注意を喚起する。	ボイズンリムーバーを持参していれば毒を吸い出す。知らないため気にせず近づくと人がいることに留意。	野外全般・山道	C	○	○			○
63	個別危険事項	イノシシ	イノシシを発見した場合は他の人に知らせ、ゆっくりと後退する形で遠ざかるように行動。背中をイノシシに見せるような形での行動はイノシシを興奮させて襲ってくる場合があるので避ける。	突然の遭遇が最も危険。遭遇した場合は落ち着いて行動。ビックリしての転倒、転落などに注意。生息域は南房総地域から北総地域に広がっている。	2012. 1.8午前9時半頃に鴨川市の関東ふれあいの道でイノシシと遭遇したハイカーが襲われてけがをした事例あり。生息密度が高い南房総地域では鈴などを携帯して相手に人間の存在を知らせることも考慮。	野外全般・山道	C					○
64	個別危険事項	マダニ	春から秋の活動期にかけてはマダニに噛まれないように肌の露出を避ける服装(長袖、長ズボン)を心がける。	マダニが媒介するウイルス感染を防ぐため、マダニに噛まれないことを心がける。野外活動の後は風呂に入り体を点検。ダニが食いついている場合は無理に剥がさず医者に行くように説明。	明るい色の服装だとダニに気が付きやすく推奨。ダニがしっかりと皮膚に食いつくまで1日程度かかる場合もあり、風呂は非常に有効。	野外全般・山道	C					○

65	個別危険事項	ツタウルシ・ハゼ等かぶれる植物やトゲのある植物	適切なアドバイスを行いかぶれ事故やトゲによるけがに遭わないよう注意する。	適切なアドバイスによる注意喚起が重要。危険な植物に気を取られての転落・転倒等にも留意。	下見時に除去できれば除去しておく。	野外全般・山道	C						○
----	--------	-------------------------	--------------------------------------	---	-------------------	---------	---	--	--	--	--	--	---